

無量光壽

法身體大を明す

初、如來の法體の名義——二、法體三義（獨尊、統攝、歸趣）——三、三性を分別して法體の實性を明す——四、法身の量——五、法身の本質——六、法身の内容——七、法身に顯動不動の二面——八、統攝（天則秩序に一切を生産する法身二大屬性）——九、歸趣（終局目的に萬類を歸趣せしむる法規と一切慧と解脱の三徳）

歸命無量光壽尊、即ち法身ビルシヤナ佛。

無量光壽は三身一如なる如來の名を擧ぐ。ビルシヤナは其法體即ち如來の法身なり。歸命は宗教的客體に對して崇敬すべき義。無量光壽尊は其對象の本尊なり。其本尊

の法體即ち佛身はビルシヤナにして、汎神的に觀すべき法界身の如來、即ち宇宙一大精神態を表號的に擬人的にビルシヤナ如來と名づく。また絶對無限の心光は法身に周徧して照さざる處なく、永恒の生命として靈的活動せる法體なれば、無量光壽と名づく。

密家には此法身即ち宇宙全體を唯一の如來身として、金胎不二の大日如來として表號す。略して解説せば、金胎とは理智の義。宇宙全體に周徧せる五大即ち地水火風空と、識大の大元素は宇宙の現象なり。萬有の本體にして此六大を離れて萬物あることなし。六大の中地等の五大は物體にして之れを理と云ひ、又胎藏とす。識大は智にして即ち金剛界とす。宇宙全體は六大なれば、識大は宇宙精神、他の五大物體とは六大相渉入して無礙なり。六大を本體として四曼を相とす。宇宙現象は其相なり。萬物は悉く大日の曼荼なり。例せば不動また觀音と現はれたるは大曼荼。三摩耶曼は本誓とて、各々本づく天職を有して、文珠の智、普賢の行願の如く、之を表示して智劍を執

り如意を持つが如く、法曼とは法は軌、生_三物解_一とて、理を知ること。羯磨とは事業、各其分を實行することなり。

三密とは身口意の働き、宇宙即ち法身の大日如來なれば、宇宙の動作皆な大日の行爲にして、萬物の音聲悉く大日の言語、其萬物の秩序あり理性ありて意味なきはなし、是れ大日の意業なり。

表示的擬人觀

全宇宙を色心不二の大日と云ひ、神の本質を表示するに人格を以てす。

汎神、世界は全一體、物質の萬物は普遍の相關に統一せられ、内容生活も亦全一なり、精神に統一せらる。

六大は物質と意質の二質なり。此兩面は同等の位にあらず。識大は眞の實在にして五大は意志に實現せられたる現象に過ぎず。識大と五大即ち色と心とは本と一體の二

屬性と云ふべし。之を全知全能なる如來一大精神に歸せざるべからず。故に六大に全知全能即ち絶對寫象と絶對意志となり。是を統一せる精神を如來法身と云ふ。

汎神論に全一の如來身を論究する要點は、世界萬物は普遍の相關に統一性を有し、全一體、萬物は内部より自發的の調和を保つものにして、外界より必然に律せられて活動するものに非ず。

全體としての萬有は外的の制裁を受けず。活動は自己の内部より自發的にして外界より世界に傳ふもの無し。汎神論の神は人格に擬するも本より人類に有する内的生活を有するに非ず。人格の自己意識なる思考及び意志の如きは、全一なる神に有りとは云ふべからず。神には人の如く感情自覺等の如き個人的人格の要素にあらざること言を俟たず。人間の不圓滿なる不完全なるに反し、神は完全に圓滿、如來を人格に擬するは、全智全能神聖等の屬性なる唯表號的の形容をなすのみ。是れ全く如來の本質を人格なりと云ふに非ず。宇宙精神を人間精神に比して、神に是の如き精神有りとして

寫象し、最完全なる善美なる性質によりて、表號的に神を形容して人格に擬す。故に表號的擬人觀とす。

密家には、即事而眞とて、宇宙現象即實在として、之を大日心王如來と號し、現象界は全く大日心王の表現にして、心王如來を離れて現象ある事なし。故に之を心王の表徳とす。宇宙本體本來大日如來、表徳光明長へに照らし、一切處として密嚴淨土に非ざるなきも、一切衆生は自から無明に翳せられて如實に法界の眞相を知見すること能はず。神の力に依りて實現せられたる相待の萬有も、如來を離れたるものに非ざるも、如來の本質は絶對。かゝる衆生の爲めには、ビルの本質を直觀すること能はず。此に於て神の超絶論起る。

如來の超絶と内在

華嚴、宇宙本來十佛の自境界なれば、如來の自中存在的宇宙現象なれば、即ち内在

的汎神論なり。それと共に如來自中存在なる宇宙の中に、因分可説、果分不可説とて、如來の内在なれども、世界は意志によりて實現したる客觀界なれば、現象即ち如來自性の本質なりと云ふ可からず。有爲轉變の世界即ち如來の本質と同一視すべきものに非ざればなり。

神と世界とは、質に於ても量に於ても、世界は有限神は無限、絶對と相對、規定と無規の如く、自然は神の中に沒入すとも、神は自然の中に沒入するを得ず。本質より云ふも吾人の認むる萬物の本質は全く神の本質と同じからず。絶對なると、萬有は相對なると即ち廣延と思考を有す。神は萬有に超絶的なりと云ふべし。

神の本質は絶對的に眞善美を以てす。世界は然らず。華嚴には超絶界を十佛自境界とす。即ち如來の自性本質なり。十身とは、衆生身、國土身、業報身、聲聞身、獨覺身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身、之を融三世間の十身とす。衆生と國土とは正覺世間となり、中に就て衆生と國土と業報とを染分とし、聲聞緣覺菩薩如來智法

の六を淨分、第十の虚空身を圓融無碍とす。一切萬法佛體に非ざるなし。萬德莊嚴、包攝無窮、主伴無盡なり。

如來身を更に十種に分ちて十佛とす。即ち菩提、願、力持、化、意生、威勢、相好、福德、智、法身なり。此十身は相互に圓融無碍の徳用を有し十佛は一體のビルシヤナなり。ビルの本體は絶對無限なれば、現象界即實在にして一體なれども、甚深不思議の眞面目は、釋迦牟尼が所證の境、華嚴三昧海十佛の自境界なれば、其圓滿なる本質内容は、吾人の認むる本質を以て全然同一なりと云ふべからず。吾人は甚深なる三昧の中に於て唯其本質と契合することありと信するのみ。

自境界は自ら證入して自知するのみ。何ぞ言説を以て之を説くことを得ん。故に果分不可説と云ふ。宇宙全一のビルを、一方には表徳として、現象即實在として、色心不二の大日とし、他面には法身如來の本質内容は一切に超絶し、甚深難思、證入のみあつて相應するものとし、超絶たる神靈界なりとす。同一の**アミタ**の法身なり。衆生

ビル體內に在つて自ら覺知せず、妄に境界を見る。ビル即ちミダの法體。時間空間の形式を超絶したる心靈體。此れを無限光壽と云ふ。此れ宇宙の本體にして萬物の所依たり。十方三世法報應及衆生國土の本體。故に楞伽に十方一切法報應及菩薩及化身、悉く無量壽極樂國より生ずと。十方三世一切諸佛諸尊の本地とす。

統 攝

宇宙萬物は全一精神即ち法身に統一し攝理せらる。宇宙を構成せる諸の部分が相互の關係、又全體と部分との關係を如何に寫象すべきかとの間に、原子論、超然神論、自中存神論あり。萬有は全く獨立の無數の原子より起ると云ふは元子論。また萬有に適する秩序の統一あるはたゞ獨立の無數の分子が偶然に集合より成立したるに非ずとし、それよりは高等なる統一なる元理を立つこれ超然神論と汎神論なり。宇宙以外に在つて超然として世界を統攝することは超在論にして、宇宙萬有の中に存在すると立

つるを汎神論とす。

今は汎神論。宇宙全一の精神によりて萬物は統攝せらる。例へば人の身體は有機體にして無數の細胞を包括し、また人の精神はそれと等しくすべての精神活動を包括すると同じく、地球上の萬物は地球の爲めに包括せられ、又地球は太陽系に統攝せられ、無數の天體は全一の爲めに統攝せらる。一切の精神は全一の精神に統一せらる。例へば人に理性なければ秩序を統ぶる能はざる如く、宇宙全一が精神に非ざれば、天體無數の星宿より小にしては萬物の秩序を整ふること能はざるべし。宇宙萬物時間空間の形式に、秩序統一の根底として一切小大を規律的に規定し攝理する處の理性が吾人が理性の根柢にして、全一精神の理性なりと云はざる可からず。また十方一切無數の染淨諸刹土は悉くミダ自性法界宮、十方一切諸佛天尊は本體卽ミダ一尊にして、彌陀の差別分身ならざるなし。故に之に統攝せらる。

無量尊と名づけらるゝ所以なり。

歸趣の理

世界過程は天則秩序の統一理性ありて、萬物は之れが爲めに攝理せらる。萬物、生命の向上進化するは宇宙に終局目的に歸趣する理性あるによると云はざるべからず。

宇宙の一分たる地球の事物生命が向上するに於ても、終局目的の理性あるが如くなるを知らん。目的とは向上發展して情神生活が眞理の終局に歸趣するにあり。地球の發展は生命の現化手段、生命の發展は意識の發現を目的とし、意識の發展は精神の向上を目的とし、精神の向上は宇宙精神の目的に參與せしめん爲め、地球の生命が向上し發展し來りしは、是れ宇宙に終局目的の理性あること疑ふ可からず。

目的因果

天則秩序の過程なる萬有は、物心兩界を通じて因果律に規定せられ、此因果と目的

とは同一にして外部より之を理論的に、時間的現象には因果に、非時間的理性には目的。生命の向上は時間的現象の形式には因果律に規定せらるゝと同時に、向上し行くは宇宙の目的にして、目的の理性には、豫じめ目的設計なくも、自から終局目的に歸趣の理性に適ひて、因果律の向上と目的とは同一の結果を生ず。

人は目的觀念を有するを以て、因果的形式は等しく目的理性なりと云ふべし。人の理想目的が外部より見れば因果、物心兩界は同一の兩面なれば、內的過程即ち人の執意目的の內的過程が外部の因果過程と同じく、宇宙の物質界の因果は內的過程には目的論的の理性なりと云ふべし。

宇宙全一の精神には終局目的の理性に於て宇宙には眞實深奥の意義あり。

如來の目的に歸命し終局の眞理に歸趣するものと信する人の爲には、如來の法身と般若と解脱の徳あることを求む。唯一切知と能とによりて、天則に一任するよりは、すゝんで心靈を開發し惡質を解脱して、如來の目的に參與することを望むものなれば

なり。

絶對無規の實性（人性、世界性、神性の三性）

三性を分別して法身の實性を明す。解脱を要する宗教意識に人の天然精神生活より自己の精神を依屬するに三種あり。

一、偏計所執性、二、依他起性、三、圓成實性、

偏計性とは各個體は自己を組織し形成したる原因を識らず、偏に此身心を分別計度して實我を執す。然るに個人性なるものは衆の要素が相聚りて而も此身心を形成す。之を聚むる元理は、天則により、世界の自然律なる因縁の相關に規定せられて此身心を成す。是機制我の假和合を實我と計度す。此機制我なるものは因果の規定を離れて特別に我あるにあらず。然るに素朴の人は自ら元理を識らず偏に分別して實我とし、之を精神の中心根底とす。すべての迷妄顛倒之によつて生ず。

二、依他起性——相待規定の世界性。

天則に律せらるゝ世界性なるものは因縁の相互に規定せられ、因果に約束せられ他の要素が相依り相待つて成立す。横には因縁相關して空間を成し、豎に因果關聯して時間的に相續し、大にして天體の星宿小にして一切の動植物に至るまで依他の規定を離れて成立するもの有ることなし。これ世界を成す處の天則理法にして、現に吾人の身心も此理法に規定せられて成立するものなり。之を識らずして因縁假和合の上に實我を執す。爲に世界性との調和を缺く。

依他の世界性なるものは相待としては眞理なるも、此相待規定なるものは生滅變易常なく、畢竟の依止とすべきものにあらず。斯る世界性は因縁の故に有、無性の故に空。因縁即無性、無性即因縁と佛教は説く。

天然の人は因縁規定せられたる假和合の世界性に依屬し、世界は全く自己の畢竟依屬するに耐るものと謂ひしも、世界性はとても自己の欲望に満足を與ふべきものにあ

らず。宗教に解脱を求めんには世界を依止の中心の根底とする意識を超えて、更に進んで畢竟の依止とすべき真理の中心的根底を求めざるべからず。

三、圓成實性

圓滿成就眞實性なり。世界性の相待規定なるものは規定によりて轉變し動搖常なき性なれば畢竟の依止にあらず。此世界性を超えて最終の根底を求めんと欲すれば、世界其ものゝ根底なる宇宙の實體に求めざるべからず。實體は絶待無規定、相待に規定せられず、因果的に轉變するなく、實性は迥かに相待の上に出で、絶對、絶對なれば他に依るなく、また他に規定せらるゝものにあらず。生滅有無一異等の一切の相待を超絶して絶對獨明なり。

實性は如來の自性にして絶對の故に圓滿、規定を離れたる故に本來成就、實體の自性の故に實性と名づく。宗教意識が解脱を求めんには先づ因縁規定の機制我を中心とする迷を脱し、進んで因縁規定の世界性依屬の意識を超へて、絶對無規定なる如來の

圓成實性に依止の中心的根底として、こゝに於て畢竟の依止を得たるものとす。

三性の關係

絶對なる實性に自ら二面あり。不變と隨緣即ち不動と顯動。一面は永恒不動の涅槃の自性、他面は隨緣顯動して轉變無窮。これ法身の一切知能によりて天則秩序に生産する相待規定なる世界性と顯現するものを隨緣の顯動とす。二依他の世界性は實性の隨緣顯現にして實性を離れて自性あるにあらず。三の偏執性は相待に規定せられて因緣所成の機制的自己を實我と執す。因緣の規定を離れて別に自性あるに非ず。此機制的の自己なるものは世界の因緣に規定せられたる假和合のものなれば實は假我なり。世界性の因緣成なるものは、其原、如來實性の一切知能に天則秩序の統一せらるゝが故に實性を體とす。

偏性は我自由にあらず。因果に規定せられたる機制的の故に依他は畢竟の依處にあらず。

す、相待規定せらるゝが故に、宗教意識が畢竟依屬すべきものは絶対無規定なる實性にあり。

此實性を意識する時は自己及び世界の最根底を認得、絶対自性を自己の中心的根底とす。

法身——體量と體質

五蘊六根十二入十八界七大本如來藏妙眞如性衆生本具理體是即諸究竟果德之本

法身の體本質を明さば、唯物論者は宇宙實體本質は物質分子と云ひ、唯心論者は實體は唯一の觀念態にして物質は虛妄の現象のみと云ひ、唯理論者は實體本質は物心を超えたる眞理即ち眞如の理等と名づく。また物心平行論あり。物と心とは一體の兩面に過ぎずとす。

今大乘圓滿の華嚴を所依とし、現に宇宙は一大精神の顯現なりとし、之を一心法界

また總該萬有心と名づく。所謂心とは物心相待の心にあらず、絶待的精神、萬象は其體上の顯現に外ならず。

本質を暫く起信によりて明さば、「真如の理虛融平等の心性は一切差別の相を離れ名字の相心縁の相を離れ、畢竟平等にして變易なし。また破壊すべからず。唯是一心。名相なきも言の遣るべきものなし、一切の法皆眞の故に、更に亦一法の立つべきものなし、一切の法皆如の故に。」是眞理は唯觀念によつて能所一致せる處に於て自ら契合して證のみあつて相應す。

絶對精神の本質を表明するに二義。一、如實空。二、如實不空。

如來藏眞實空便是離即離非是即非即之體眞實不空生本具德如來果德之本。

藏性非因非果所依

如實空とは一切差別を超絶したる眞體。消極的に詮表せば、自然を形成せる時間及び空間因果律より生ずる物質存在一切意識的心念を超え、一切差別の相を絶し、無有

等の相対的概念は悉く相應せず。如來の本質は超空間超時間超物質にして而も一切に遍せる動力存在。

如實不空。之を積極的に表明せば、自性天真即ち永恒一切内存の心靈態なりとす。

また總該萬有心と云ふ。

楞嚴曰如來常說諸法所生唯心所現一切因果世界微塵因心爲體——（心を本體とす）

本質は内に非す外に非す一切に遍滿し萬有を總括せる觀念的存在の故に、物心二質に綜合して而も無碍なり。また一切を展開する動力を以て一切の中に存在して無碍なり。時間を超え、始終を絶し、永恒不變、三世際を盡して一念、また念劫圓融、絶對同時態。心靈態とは物心一如の眞心永恒萬物中に存在す。一切知と遍動力を以て時間空間の形式に萬物の爲に秩序の根底とし、一切を規定し、生活々動せしむ。

遍動して萬物と成るも觀念態の自性を改めず。

内容無盡の徳を具し——體に具する徳

全一の心靈態に無盡の性徳を具備し、而も内容無盡の性徳を具備するも永恒に如くなり。故に如此眞心靈、内容無盡の性徳を具備するが故に、楞嚴には如來藏妙眞如性の名を以て其徳を表す。藏とは無邊の性徳を含蓄するの謂、妙眞如とは而も本質常に一如の義。

如來藏性本具十界身心土三千の理一念に具備乃至重々無盡の（理）染淨（世）界

心靈態一如なれども自然に無邊の性徳を具し、一切自己に有し、常恒能動のみにして所動なく、かゝる徳を表するに、密には胎藏界と名づく。宇宙實體本質内容に一切の萬法を包含して遺すことなく、萬物これより出でざるはなき義なり。楞嚴經の意によれば一切世界の五蘊六入十八界乃至一切佛法及地水火風空識等の大性は本如來藏にして妙眞如性にして、法界に周徧す。かゝる眞性は因縁に依つて成るに非ず。自然に非ず。

藏性周遍が業に循ひ縁に随つて發現せる世界萬象なりと。

華嚴によれば、如來實體内容、圓融無碍、十佛自體、一切事理相即相入、重々無盡、不可説、性起と縁起體用無碍なり。性に無邊の徳を具し縁に無盡の事を現す。

同一の心靈無邊の性徳を具して萬法を顯現すと云ふも、竟に二大屬性に歸す。一切知と一切能、即ち絶對寫象と絶對意志となり。地水火風空大の性は絶對意志の力に實現せられたる客觀々念態にして識大とは絶對觀念の主觀現象なり。故と知と能との屬性を有す。全一の心靈なり。

生 産 門

生産門には一切の

知能の權に天則の

秩序は因果の律として

萬物を開きて產生す

全一心靈なる法身はいかにして宇宙萬有を開發せるや。之を縁起門と名づく。

一大精神に體相用の三大あり。即ち寫象と意志を屬性とする絶對心靈なり。現宇宙は天則秩序的に一大意志に實現せられたる客觀的觀念の實在なりとし、是宇宙の物質現象なり。意志の遍動力は常に絶大の設備を以て建設的事業をなして暫くも休止せざるは、是宇宙に永へに行はるゝ所の造化の妙用なり。一切知は善く一切萬有に含蓄し天則秩序を統攝する理性、一切能とは一切を生活々動せしむる力なり。

宇宙萬物は物質非理性的分子が偶然に聚つて生ずるものにあらずして、萬物は理性的規律に従つて左右せられたり。

一切知は萬物内存の理性にして一切大小の雜多を統一規律に總括する理性、大にしては天體より小にしては萬物に至る迄秩序の整然たらざるはなし。此萬物は自發的の調和を保つものにて自然界の事物は外界より必然に規定せられて秩序を整ふものに非ず。また全體としての萬有は毫も外部の制裁を受けずして、その運動は各其内部より起る自發的活動にして、外より此運動を傳ふることなし。

宇宙は全く心靈にして理性と意志力を有する性能なりと觀せざれば、秩序整然として萬物を攝理し生活々動すべきの能あらんや。

宇宙萬有の自發的運動內的理性に調和せられて秩序をなすを性起と云ふ。宇宙全一の理性より萬物は自發的なりとの義、また萬有が相互の關係に於て因縁規定の作用あるを縁起論と名づく。

內的理性は具備すとも、相互の關係に即ち縁にあらざれば內的性能を開發せず。

同一の理性より發現したる萬有には萬物相關の理を有す。一切の事々一理中の事々ならざるなければ、一として孤立なるなく、互に圓融關係せり。石が地に有るも引力による。地球と太陽とは相互に引力の關係を有す。地球上の萬有相互の關係によつて相互因縁相依りて成立す。萬物は產生せられざるなし。

因縁の關係には六因四縁の因縁論起る。

天則秩序に理性に萬物を開展し生産するに、全一に統理せらるゝ個々なれば、萬物

が自己の内部より自發的に開發すべき性能を有するが故に（種子）因門あり。各自性は相待の關係によらざれば、自性を開發すること能はず。こゝに於て緣門あり。これ性起と緣起二門ある所以なり。

因門六義。

一、空有力不待緣

自性空の故に自己に變易し消滅すべき性なるは、緣を待つて初めて然るにあらず。

二、空有力待緣

自性空の故に緣によつて應化す。

三、空無力待緣

自に定性なく資緣によらざれば獨りのみにては成立せず。

四、有有力不待緣

自性不改なるは自ら任持するは緣を待つてしかるに非ず。

五、有有力待緣

自性は縁に随つて成るものなれども有力の故に自性を遺傳す。

六、有無力待緣

自性は有能なるも資縁によらざれば、

隨緣轉ず。適者生存の（）

空は消極、有は積極、消極積極の兩性は萬物に存す。生理には空と有とは陰と陽との如く、精神には感性和理性即ち所動と能動との如し。雄には生力ありて養力なく、雌には養力ありて生力なきが如し。教育には感性を空と云ひ理性を有と云ふ。

四緣。

一、因緣

親しく果を生ずる原因、心は此の種子より起る。

二、等無間緣

前念滅する時共に後念が起り、前滅後生、無間に連續するが故に。

三、所縁々

所縁とは客觀的對象のこと、この刺激によりて心を生ず。

四、増上縁

心を生ずる時に大に助けになること、また如來を念する時増上縁となりて惡念をのぞく。

歸

趣 終局目的の理性

攝取門には法身と

般若と解脱の徳をもて

衆生の心を擇みては

開化し終局に歸趣せしむ

宇宙天則秩序の理性に世界萬物を向上し生命的過程を進化する理法の存することは最終局目的に歸趣せしむべき方便なりと云ふことをうべし。世界に目的理性の存する

ことは已に論しぬ。如來はいかなる設備を以てか終局目的に參與せしめん。

法身般若解脫の三徳を以て衆生を攝す。

法身は絶對主體の根底として已に天則秩序に生産す。而して衆生に本來佛性を具有せしむるは終局目的の理性を豫備せるものと云ふべし。向上する時は本能中の理性あらはるゝなり。人の本有の靈性は一大理性を根底とするも、天然の人は依他と偏執性の爲めに覆はれて機制我を眞我と謂ひ、自ら之を開發顯示すること能はず。

然るに此理性は本有の性徳にして、修成にあらず。但修によつて顯示するのみ。此靈性を開示するには、法軌に則つて如實に修行後、豁然として貫通し、自己の心靈即ち一大心靈と一なることを證すべし。

法身とは絶對心靈にして衆生心の最根底なる故に修によりて開顯し初めて知る。

般若は如來の一切慧大智慧光明大にして處として照さざるはなき、此智光や衆生の心靈を開發し、一切に洽ねき光、如來の一切慧光の心靈は日光によりて肉を照すと同

じく、智慧は四面を顯照す。

鏡智としては一大觀念態、主觀客觀々念の本體、吾人の心靈開展する時は自己の觀念此一大觀念と致一なることを知らん。

平等性智は吾人の理性と本來平等にして、一切に洽ねく、また一切秩序を統一攝理する處の理性と自己の理性と平等。眞理の光明は宇宙の内容としての光。

妙觀察智の德によつて生佛感應、法界一切の事事と相即相入、事々無碍自由の妙智。成所作智は吾人の心靈に對して微妙の感覺的清淨國土の莊嚴を感覺せしむる等。

如來般若の德光と自己の心靈と相應する時は四智圓明となる。即ち本覺の一切慧光が吾人の心靈の窓に現はるゝに外ならず。

解脫の德とは人は生理機制と世界因緣規定の爲に意志自由を束縛さる。如來の智と能との德によりて衆生を感情及意志の縛を解きて心靈々化して如來の中に自由を得せしむ。即ち神聖には如來の中に道德自律を規定し、正義としては我を犠牲に供して聖

意の目的に隨順して活動す。

恩寵としては無縁の慈悲衆生に知見を與へ、大我に融合し意志を靈化する等、總じて云はゞ、衆生の素質を解脱して自己の中に安立し目的に協力せしむる徳用を云ふ。

法般解の三徳と三大とは如來に於ては同一なれども世界を生産する天則秩序には一切知能と名づく。終局に歸趣の理性としては三徳と名づけ、同體の異作用なり。

三徳の理性本來法界に周遍すれども、衆生は無明に覆はれ生理機制に制せられて自からこの徳性に參與すること能はず。是に於てか如來自在の力より報應二身を示現して衆生を終局目的に攝取す。即ち因には法藏と名づけ、大願大行を起し、果には十劫正覺の相を示して、已に亡びたる衆生を回復して目的に攝取す。又應身を示し人類を教化度脱す。是報應二身は衆生に終局目的に歸趣すべき理を開示せんが爲に出現す、等、十方三世報應變化身は皆同く目的に誘導せん爲に示現す。此教導によりて如實に法規に順じて修する時は法界周遍の目的理性なる三徳と相應して終局に歸趣す。

宇宙の本體

本體論の問題は實在の本質如何と云ふにあり。蓋し宇宙萬象多様なりと雖も二大種に還元することを得。空間を占有し空間に運動する物體並に空間の性質を有せざる心意即ち精神となり。萬物は物心二元と、また其根底は同一一個に還元す。

一元論は唯心論唯物論あり。

二元論は萬有は全然性を異にする二種の本體即ち物と心（延長と思惟）とす。此の兩者より成るの見解は通俗の頭腦に入り易し。されど哲學は二元論を排して一元論に到達せんことを欲す。一元論に物を以て唯一の實在とする唯物論と心を以て終極の實在とする唯心論と、次に實在の性質は不可知的となすとあり。

第二宇宙論。一切事物の關係は如何に抽象せば可なりやと、換言せば宇宙を構成する諸の部分相互の關係また全體と部分との關係はいかに見るべきかの問題に、原子論

超絶神論、擬人的神論、内在神論即ち汎神論等あり。萬有は互に全然獨立の無數の要素より起るとは原子論なり。

萬有に遍く秩序調和統一の事實あるは常に獨立の無數の要素の偶然の集合より成るとするを許さず、一個の統一の原理を求めんとす。此統一原理を世界以外に置神之を人間の家屋を造營する如く、世界を創造し支配し行くものとするは超絶神論擬人的神論なり。

此原理を世界以外に置かすして世界の内に在りとし世界はこの原理其物の發表顯現なりとなすは内在神論また汎神論なり。

本體の一元論は、一、外界の事實より出發すると、二、内界の事實より出發するとに依つて二種に分る。唯物論及び唯心論は是なり。前者は物質及び運動を以て實在の根本の形となし、之によりて知覺思考意志等の心意現象までも説明せんとし、後者は吾人の自己意識に於て經驗する如き内的生活の事實を以て根本の實在とし物質界はこれが顯現にすぎずとす。

近世哲學の祖デカルトは明かに二元論の主唱者なり。思へらく物體と靈魂とは何等の共通點をも有せざる二形式なり。物體は廣延を以て唯一の屬性とする本體。靈魂は思考を以て唯一の屬性とす。此兩本體合して萬有を構成すと。二元論は終局は一元論とならざるをえず。心意の側に感覺知覺あれば肉體に感官の刺激あり。スピノザ曰く兩者は根本に於て同一にて肉體と靈魂とは絶對的に異なるものに非ず。兩者は其根本に於て同一なり一體の兩面なるのみ。例へば同一の圓の周邊にてありながら内面より見れば凹線となり外面より見れば凸線となるか如く同一體を内面より見れば心意外面より見れば肉體なり。尙ほ又此一體兩面の關係は單に人間及び動物に限らず遍く萬有を一貫せるものなり。單一の本體は一面は物體界の形を以て一面は意識界の形を以て現じ、物の運動あれば必ず之に相當して心意の作用あり。略言せば一切の物體は必ず有心なり。一切の靈魂は有體なりと云ふべし。物心の間には相制の作用に非ずして平行的作用ありと。

此スピノザの一元論は二方面に轉せり。兩面何れかに重きを置き孰れか根本實在と

し、物質の研究に専心なる自然科学者はホッブスにしてスピノザの思想を唯心論に發展せしはライブニッツなり。

兩者は根本一なれども同等の實在の本質を示すものに非ず。實在の真相を示すは精神なり。萬有の終局の要素たるモナードは精神にして廣延物體は唯此精神の吾人が不完全なる智性に映する相なるのみ。其外認識論よりして唯心論に到達せしものはバークレイなり。殊にカント以後に至つては物體界は吾人の心意に於て其真相を示せる實在の顯現に過ぎずとの思想は獨逸哲學者の根本觀念と稱すべし。

唯物論の主張點

萬有を構成する實在は物質なり。廣延と礙竄性とは其屬性其根本あらゆる活動音色熱電氣等一切事象此の運動より起る意識狀態なるもの其數に洩れず。

生理學物理學上の根據。心意の過程は必ず物質過程と密なる關係を有す。意識を有するものは有機物のみ。狭くは寧ろ動物のみ。動物の中に殊に意識と關係を有する部

分は神經系統なる如し。

されば科學は意識狀態の原因を此肉體の性質に求め心意過程を以て神經系統の作用なりとす。靈魂を肉體以外に説明するは科學未開時代の產物のみ。雷電なる一種の事象を雷神と云ふが如し。疾病を病神とす。自然哲學すら生活力と云ひ特殊の勢能を假定して有機に轉する過程を説明せんとす。

意識狀態の心意的事象に必ず前行若くは伴起する事象を發見し其相關の法則を規定するにあるのみ。すべて腦髓神經系統に於る作用のみ。靈魂などの心的勢能が原理たるべからず。

意識は物質と類を異にする特異の狀態となすは其實然らず。科學の研究によれば唯だ物質の運動の特殊の形に過ぎず。心的狀態其物は客觀に見る時は一種の生理過程に外ならず。蓋し輓近の自然科學最高原理はエネルギー保存の原理なり。或は塊の運動變じて其中に存する分子の運動となり、顯勢變じて潛勢と成る。エネルギーの形は千變萬化するも其量は寸毫も損益なしと。

今意識と生理作用との關係を見るに下の二種の場合あるべし。

一、運動の外界より入り來りて生理作用を惹起し心意作用となる場合、例へば吾人が音聲を聞くに第一に發音體より起る空氣の波動が吾人の聽神經を打ち之をして一種の生理作用を起さしめ而して此の作用は神經纖維によりて中樞機官に傳達せらる。

而して一種の心意作用たる感覺を起す。心意作用たる感覺は其實末端の刺激によりて中樞機官に起されたる神經作用に外ならずと。

二、心意作用初めに起り運動を内界より外界に傳ふる場合

腕を延して一の物體を捕捉するに先づ腕の關節運動の直接の原因は筋肉纖維の收縮なり。其は動神經纖維によりて傳へられたる衝動なり。而して此衝動は中樞機官より出るものとす。そこで腕を延ばし物を捉らんとする意志を認むべし。故に知る心意過程は本來物質過程に過ぎず。換言せば動神經の纖維の興奮の原因とて豫想せざるべからず。何んとなれば物質的結果は物質的原因を有せざるべからず。故に意識狀態其物のみにて物質の運動を惹起すとせばエネルギー保存と云ふ自然科學の根本原理は破れ

ざるべからず。

比較解剖學に依れば神經系統の發達と精神の發達と並行し動物中腦髓の量に従て知能發達を異にす。動物中人類は知能發達完全大腦の容量及び其他の發達も亦動物に冠たり。又人類の中に於て民族の腦髓の發達は其文化進步の程度を示し又知能卓越なるには腦髓も多く發達す。亦た腦病と精神の關係生理學病理學の研究に徴する。

老年に達せば精神活動に多少の衰弱ある如く而して其が腦物質の減縮と老廢とに基くは解剖學の證明する所なり。要するに一切精神病は即ち腦髓の病なり。是れ腦髓即ち精神なることを確信するにあらずやと。

宇宙論上の根據。宇宙は初めより今日の如き狀態を呈せしにあらず。初め有機物によりて精神生活意識狀態あらざりき。地球さへなき時ありき。今日の遊星系なるものは初め瓦斯狀或は星雲の大塊にして此太陽初め自軸を回りつゝありしが久しきが爲め其赤道部に一帶のふくらみを生じ星雲塊の熱度減じて漸次に收縮し此一帶のふくらみは遂に中心體を離れて一個の環狀をなして中空に懸り此環狀破裂して獨立の天體とな

れり。此事數回反復されて茲に太陽を中心として回轉しつゝあり。而して遊星の體系を生ずるに至れり。吾人の棲息する地球は遊星の一なり。地球の初めは熾然液狀の一塊たりしに漸次冷却し固結して土壤岩石を生じたり。水蒸氣は凝つて水となり。此に於て地球は初めて有機物の生起を導く状態を呈するに至る。有機物の最原始は微小なる原形質なりしも漸次内部の組織を生じ遂には消化機官たる囊狀部及び核を備へ又分裂によりて生殖作用を營み複維なる體系に發達するをうべき細胞を生ずるに至る。かく一方には生物體の内部が漸く分科し行きて種々の部分雜多の器官を生ずると共に生物の種類も亦漸次に分科しゆきて種々の生物を生じ其中より遂に人類なるものを出すに至れり。人類は他の生物と起源を異にするが如き一種特別の觀念を起さしめたり。されど自然科學はこの迷妄を打破し人類は決して特別なる分子として世に出されたるに非ず。其初めは他の生物と劣等の有機體より起り生存競争を營みつゝ無數の年代を経て遂に現狀に發達せり。地球上過去の歴史に見るが如し。然らば未來はいかに晩近の天文物理等の知識に依つて之を推測すること難からず。生命と精神は其原始を想ふ

に其終焉を有すべし。蓋し太陽の熱の量は無限に大なりと言ふべからず。而してこの限りある熱は放散して之を補充するものなしとすれば何時か盡くる時が到來せざるべからず。斯の如き期を待たずして地球は早已に冷却し了り、一切の生命意識は絶滅するに至らざるべからず。須臾にして果敢なきものなり。是等の生命は僅かに蜉蝣一日の榮華にて本來の無に歸す。是に至つて生命なく意識なし残るものは恒久の物質と運動の法則のみと。精神の如きは無限の物質中の小部分宇宙巨大なる歴史より見れば眞に大海の一滴とも云はざるべからず。無始無終に亘りて永久存在は物質と運動とのみ是を唯物論者の主張とす。

平行論（汎心論唯心論）

平行論に包含せる二命題。物質過程は心意過程の結果にあらずと言ふ命題の歸結、高等の有機體と雖も一個の自動機械にすぎず。

心意過程は物質過程の結果にあらずといふ命題。

心意過程は物質過程の結果にあらずといふ命題の歸結。今鐘を聞くを假定せよ、此音聲を聞く感覺の原因たるものは何なるか。蓋し此感覺は何物かの結果にして決して因果律を離れたる孤立の事象にあらざるは吾人の承認する所此の原因は何ぞやの問に答て云はんそは空氣の波動なりと。されど平行論によれば此答は許しがたし。感覺は心意過程なれば物質運動の結果たること能はず。然らば此原因は此音聲を聞く人の精神中に於て其感覺に先行せし意識狀態に求むべきか是れまた否なり。然らば此原因と認むべきものは唯一つスピノザ等の唱導せし普遍的平行論或は汎心説の假説を採用することと是れなり。換言せば一切の心意過程には必ず是れに伴起する物質種々の一切の物等が平行して伴起する心意過程是れなり。即ち鐘より起り來りたる物質の運動即ち空氣の波動の結果は唯神經の刺激と腦髓に及ぼしたる物質的の變化のみ。決して感覺と云ふ心的過程を惹起すること能はず。感覺を惹起するものは此空氣の運動に平行伴起する内的過程なりと。

空氣の振動に平行伴起せる内的過程

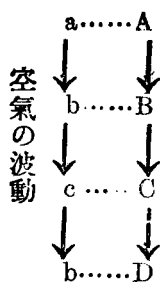
音聲の感覺

心意原則

點線は平行伴起の關係を示し矢形は因果

物質原則

的繼起の關係を示す



當に a に伴起せる A 即ち空氣の波動に伴起せる內的過程が原因となりて音の感覺を起す。故に普遍的平行論を採るは世界觀の選擇に汎心論世界觀を取らざるべからざるに至る。スピノザの一體兩面論の一轉してライブニッツの唯心論に進む。

汎心論の證

吾人の自己以外に精神の存在を認むるの原理は類推の論法なり。吾人が精神の存在を認め得るは、自己意識即ち自己内部の自ら經驗する所の感覺觀念執意等の外に同様の內的過程の存在を認むるは直接の觀察にあらず。吾人が直接に知るは物質の事象のみ。

類推法は動物界のみに限らず。

動植物は晩近の生物學者は二界の境界線を抹殺せり。

フロテイスタなる名稱の下に總括せられたる生物は兩者を一個の軀體より分枝せりとす。

植物には神經系統なし。故に精神なしといふ説不可なり。蛇は足なくして行き植物も亦神經なくして精神を有す。

植物は自發的運動の力を有せり。故に精神なしといふ説不可なり。植物は枝葉を日光の方に向け、其根を營養物に富める方に向け、其卷鬚を支柱たる物體の方に向け夜間また雨天に其花瓣を閉ぢ日光に開く。

動物は胚種の時間母胎に附着して自由移動の力を有せず。次に植物は却て水中に移動す。或は言はん植物の運動は自發的にあらずして物理的なりと。

無機界に於る精神存否

物心の平行は有機無機兩界を通じて普遍に存ずとするの證。

(一)無機物は有機體内に入りて新たな生命精神の所有者となるが故に。

無機物質は變じて有機體となる。即ち有機體は常に一定の形體を維持し其實質は新陳代謝しゆくものにして一方には外界の物質を吸収し、又他方には絶えず之を排出し新來の物質は以前の體質に代りて生命精神の所有者たるに至る。されば生命精神の根基は無機物の中に存し是等の物質が以前よりは一層複雑なる結合をなし一層發展し精神生活を現するに至る。

(二)無機物を基礎として新有機體發生するをうるが故に。

無機物が有機に入り來りて新生命の所有となるに止らず無數の動植物が無機物質を基礎として新たに發生しつゝあるは吾人の目撃する所一掬の米を地上に蒔いて數升の米に化すべく雌雄一對の鼠に與ふる時は直ちに變じて數千の生物となるべし。然らば是等の靈魂は何より來るか。精神の根基はこゝにこの無機物中に存するに非ずや。無機物に精神なしとせば精神生活の原始を説明する能はざるが故に。

晩近の自然科学は一切の物質は徹頭徹尾活動のものなりと。液體瓦斯の如きは論を

待たず、吾人が普通不動のものと認むる固體の如きも其實之を構成する分子は非常に激烈に運動しつゝあり。此分子を構成する元子また活動のものなり。動植物の自發的活動と異らず。

無機物に精神ありとするは哲學者一般の傾向なり。スピノ。ライ。ロツツエ。ヴント。晩近の自然科學者の中に已に此説を唱導せり。植物學者ナエゲラーの如き有名なる汎心論の主唱者なり。人間の精神は普く自然界を通じて存し之に運動生命を與へつゝあり。精神作用が吾人の地球上に於て最高等に發展せるのみと。(物理學者フリードリツエルネルの如きも)

吾人より高級包括的精神

吾人の肉體は有機體として無數の細胞を包括す。吾人の精神は是等の細胞と相當せる基本的の精神生活を包括するものと假定せよ。吾人の肉體はまた地球と云ふ一層高等なる統一の一部をなす。又地球と共に太陽系太陽系と共に全宇宙の一部をなせること恰も細胞が吾人の身體の一部をなすと異りなし。然らば吾人を初め其他有機無機の

萬象の無數の小精神を包括せる高層なる精神あるが如くならざるか。先づ第一に個々の天體は一個の統一されたる精神を有するものにあらざるか。

フエヒネルは熱心に地球精神の存在を唱導す。地球は普遍的生命を有せざるか。内部の液狀部外部の陸地大洋空氣其他の部分恰も吾人の四肢幹軀等の部分と等しく有機體制の關係をなせるものにあらざるか。

地球は無數の生物が偶然集りて活動すべき物にあらずして是等一切生命胚胎掬養さるゝ母胎なり。生物は地球の所産なり。一切有生有心の事物を生産し保育しつゝある地球自身は何を以て有心有生命たること能はざるか。若し全體としての地球が其部分の精神を總括せる統一的精神を有すとせば尙は一層其類推の範圍を擴張して地球其他の諸天體を包括せる太陽系の如きも統一的精神を有し遂には進んで宇宙精神なるものゝ觀念に到達することを得べきなり。恰かも吾人の肉體が吾人の精神の表現たるが如く世界は此宇宙精神の表現なり。世界精神の肉體なりと云ふことをうべし。是に於て吾人は直接なる經驗自己の肉體と精神との兩面の關係よりして最間接に遠隔なる歸結

に到達することをうるなり。

自然界の事物は有機無機を通じて靈魂若くは生活力と云ふ如き（以下斷章）

如來はビルシヤナ即ち全宇宙は色心不二の大日と云へるは神の本質を表示するに人格を以てし、

物質の萬物は普遍の相關に依りて統一せられ内容生活も亦た全一なる精神に統一せられ、

一、世界は全一體個々は絶對獨立を有せず、彼等は全一中に於て其存在と本質とを有し萬物は相待規定せられたる本質の變態なり。

二、一體の本質は廣延なる物質と意識との二質に發展す而して此兩面は同等の位にあらず精神は眞の實在にして物質は唯だ意志に實現せられたる現象に過ぎず。

三、物質界に於る普遍の相制作用は全體が自己の本質を多様の調和的變態に發展す

る内的目的論的に必然性の現象なり。必然性と云ふも外部より必然にさるゝにあらずして内部より發する目的に必然なるが故に本體は自由因即ち内的論理的に本質を發展す。

汎神論の可能を論究する必要の點。

- 一、物質界は普遍的の相制の作用普遍的の統一性を有し渾一體なり。
- 二、物質界の一切の部分は自發的の調和を保つものにして自然界の事物は外部より必然にされて活動を營むことなし。
- 三、全體としての萬有は毫も外的の制束を受けず、其運動は自己の内部より起る自發的運動として世界外に此運動を世界に傳ふる勢力なし。
- 四、自己に於て肉體精神なる二重を有す、此事實よりして漸次論歩を進めて物質あれば必ず之に伴隨して精神生活の存することを假定せざるべからざるに至る。
- 五、吾人は萬有中の一小部分なり、地球の事物に於て目的衝動性即ち目的を認識せずして自ら目的に適合せる活動の存在を認む。

然らば目的とは何ぞやの問に對して思辨哲學に倣ひて云はゞ、地球の發展は生命の現化を目的として、生命の發展は意識の現化を、意識の發展は精神の現化を目的とし従て精神の發展は即ち地球上の事實の中心的目的なりとし、従て此部分よりして全體を推すと云ふ論法にして正しとせば、吾人は尙ほ一步を進めて一切の存在の中心目的は最高の精神生活なりと云ふも敢て其事實を誣ふるに非ず。

汎心論は數ある世界觀中單純明瞭に萬有を説明す。

精神の起原を發見せんに唯心的汎心論に於て適當の位置を與ふことをうべき唯一の世界觀なり。汎心論に依て精神生活は自餘の萬物と調和をすることを得。

原子的唯物論によれば精神生活の起原存在を説明する能はず。唯物論には精神生活は常規を逸したる偶發的一種奇異なる現象にして之が起原と存在とはとても説明すること能はざるなり。

汎神論によれば全く此難點を免るゝことをえん。即ち精神生活は嘗に萬有中に適當の位置を發見するに止らず實に萬有の根底たり。且つ萬有中最重要なる位置を占む。

汎心論が最妥當なる世界觀なることは古來東西古今の大思想家が一齊に之を取るにも明かなり。プラトン、アリストテレースは萬有は渾一體なり、靈にして善なり、あらゆるものゝ絶對的統一なりと曰ふ。

獨斷的唯物論の批評

論者は言ふ、世界は原子の集合其一極少部分たる腦髓の外には靈魂と云ひ精神と云ふ如きものなしと。然らば問はん、如何なる理由を以てか、

一、宇宙靈魂。目撃すること能はざるが故か。されば動物或は人類の精神と雖も目撃する能はざるは同一なり。

二、動物には腦髓神經を目撃するが故ならば、

宇宙は腦髓神經を有せざるが故に靈魂を有せずとの説非なり。宇宙は器官作用の要なし。

三、宇宙の諸部分は聯絡散漫なるが故に統一の精神なしと云ふ説非なり。

動物體に統一を興ふる所以のものは何ぞや。其諸部分の空間上の接近なるか。決し

て然らず。其諸部分の官能上の統一なり。動物の腦髓を構造する原子は決して互に接觸するものに非ず。されば空間上の懸隔は統一の成立を碍げず。部分の運動だに統一を保ち居らんか其距離には關せず。宇宙を構成する諸天體は其空間上の關係は疎遠なれ共其官能上運動上に於ては非常に親密なる關係を有し一片の塵芥と雖ども宇宙の他の部分と關係なくして運動すること能はざるは前既に述べたり。

四、宇宙を構成する諸天體の運動は餘りに單純にして齊一なるが故に精神を有せずとの説は非なり。動物の運動は非常に複雑にして不規則なるに反し宇宙の部分たる諸の天體の運動は之に比して餘りに單純にして齊一なり。

フエヒネル此非難に答へて言へり。吾人の腦髓いかに複雑なりとするも又如何に吾人が斯く複雑なりと云ふ點を以て高等の精神性質を有する徴候をなす傾向を有すとするも宇宙は一切の複雑を包容するものにして吾人が複雑の極となす腦髓の如きも之に洩れたるものに非ず。故に其複雑の度は殆んど名狀すべからざる程ならざるべからず然らば此高度の複雑を有する宇宙に吾人よりは一層高等の精神の宿れることを拒むべ

からずと云ふ。

已上獨斷的唯物論者が宇宙精神の存在を否定する理由は一として當を得ず。汎心論は他の世界觀の大難點を脱する唯一の妥當なる世界觀なりとす。

汎 神 論

人格とは何ぞや

汎神論の神は人格を有せすと云ふ。人格とは何ぞや。第一に人間に賦與するに人格を以てし人間の内的生活に特有の形となし他の動物と無生物には之を有せず。吾人は即ち人格を定義して自己意識的にして合理的なる思考及び意志となすをえん。

全一なる神に斯の如く有すとは吾人の望むべからず。人間の内的生活と比較すべからず。

神の意志思考はいかなることは吾人の把握する能はざる處なり。

人間は不完全の故に欲求あり。之れに種々の衝動欲求起る。神は圓滿の故に求むる

所あるべからず。また規定すべき衝動欲求の存すべき理なし。また人間の如き合理的意志ある謂れなし。神は圓滿具足なり。

神の動作は人の動作と全然異らざるべからず。神は全能なればなり。吾人のとは量に於ても質に於ても異ならざるべからず。吾人の活動には企圖と實行との別、目的と手段との異りあり。神は思考即ち動作となる。即ち萬有は神が意志すると共に實在となれる思考なり。

人間の道徳的性質は神に賦與する能はず。神には本務もなく徳もなし。神が人間の如き慈悲仁愛ならんが爲めには神自ら人間とならざるべからず。

知能の方面も亦然り、吾人の知識は皆な感官より起り来る。吾人の概念は皆な知覺より構成さるゝものにして其用は唯だ直覺を領會するにあり。次に吾人の思考に缺くべからざるものは我と非我との對立なり。吾人の自己意識は自己と外界との對立に基いて存す。されど自己以外に何物をも有せざる全一は毫も是等の性質をも有すべからざるなり。之を全智と云ふ。

眞に神の本質を定義するは神は人格的存在と云ふ能はず。

況神論者が神を非人格存在と呼ぶは唯人間の不完全不圓滿を神に歸せざらんと欲するのみ。非人格と云はゞ人間以下に下さんとの語弊ありとせば神は超人格的存在と言はん。斯く云へばとて神の本質を定義せんとにはあらず。

神は人の精神の屬性を大きくして神を寫象する外に術なかるべし。藝術家が繪畫彫刻を以て神の姿を表現せんとするには圓滿なる人格の相を以てす。

されど神が眞に人間の肉體の相を有すと信するにあらずして尊き人間の姿は吾人に取りて最高最切要の相なるを以てとす。吾人が人間の尊き精神的性質を以て神を表象せんとするも亦た之と異ならず。

表象的。吾人が神の神聖智慧等を云々するに當ては吾人は唯表象的の形容をなすに過ぎずして正く神の本質を定義せんとするものに非ず。之に依て神の本質に近づかんが爲に取るのみ。約言すれば是れ眞の擬人觀にあらずして表號的擬人觀なり。是れ宗教には避くべからざる擬人觀なり。吾人が知りうべき精神は唯人間の精神のみ。是故

に吾人は神にかゝる精神を有すとして神を寫象す。是れ實に神が吾人の寫象する通りのものなるが故にあらずして、吾人の觀念には、しか經驗を超ゆること能はざればなり。即ち吾人の善美の性質によりて表號的に神を形容せば人の善美の觀念異なるに隨つて其の神の觀念も亦た異なるべからず。是れ實に國民に依つて神の觀念を異にする所以なり。斯の表號的擬人觀にして哲學の思考と宗教の信仰とは互に相ひ接近すべきなり。哲學は知によりて全一の觀念に達し此全一の觀念に達し此全一の内容は知によりて規定する能はず。是によりて吾人が把握することやうべき寫象及び形象によりて此觀念に内容を與ふるの一事は民族の詩的精神若くは宗教的天才の力に一任せざるべからず。斯の如き内容は飽くまでも表號的なるを以て之を以て宗教的信仰は科學の定義とすべからず。

科學は悟性信仰は情性。

シライエルが宗教の信仰と哲學の汎神論の調和の可能を論じて曰く、若し汎神論者にして神性を人格的に見るを不可となすものありとせば其は凡ての人格的意識の有限

なることを認むる謙讓の精神に出るものなり。吾人が神を人格的に見るや否やは人々の想像の方面に依て異なるものなりと。即ち吾人の見る所と規を一にす。

神の超絶と内在

華嚴の十佛の自境界即ち神の汎神を説くと共に、果分不可説となし神の本質は世界に超絶せりと説くも、超絶と内在とは相ひ矛盾するものに非ず。超絶神論も神の自在なる世界を説くまた萬物の中に神の勢力の存在を説く。さればとて汎神論も神の超絶性を排斥すべからず。世界と神の本質とを同一視すべきものに非ればなり。

一、是れに於て自然は有限、神は無限、自然は神の中に没入するも、神は自然界の中に没入するを得ず。其本質より云ふも吾人の認むる萬物の本質は全く神の本質と同じきも、絶對なると、萬有の物と心との相待たると、同じからず。廣延と思考とを有す。神の本質は萬有に超絶的なりと言はざるべからず。

汎神なるも目撃の自然界萬有は到底崇拜信仰する能はずと。答へて汎神とて決して

現實一切の事物を神的にして圓滿なるものと認むるにあらず。現實は神の勢力が實現せられたる客觀世界なり。

眞善美の區別。神の本質は絕對にして無規定眞善美なり。本質と非本質とを區別するは知性にあらずして意志情性なり。萬有の中に或物を以て善とし、神聖とは即ち是れ神の本質を示すものなりとなすは情性なり。汎神論者に於ても自己が切要と感じ本質的と選ぶは超絶神者と異りなし。

本質に於ては汎神なるも自然界は力に實現せられたる客觀々念にして不定の意志なり。相用に於ては異れり。

歸趣の理性(目的)

目的と因果とは一體の兩面。目的と云ふも、世界以外に睿智の神ありて一定の目的設

計の觀念を有し萬有を創造支配すと云ふ觀念を否定す。

萬有は物心兩界を通じて因果の法則に支配せられ一切の事象は悉く因果的に起るものなりとは現今科學の承認する所なり。

目的と因果とは同一

一、有目的の結合は諸の要素間の因果の關係を除外せずして却て之を豫想す。即ちすべての有目的の結合は同時に因果的の結合なり。

二、究竟性と云ふ觀念中には計畫を包含せず。即ち必しも目的の觀念を豫め意識せず目的設計なくして自ら目的に適ひ設計によりて起るが如き結果を生ずる活動を形容して目的衝動性と云ふ。

例へば建築家が家屋の設計を案出するは目的論的に制約せらる。辨士の演説も然り。吾人の生活も其進行は明瞭に若くは冥々の裡にか一定の目的を追求するよりして起る。一國民の行動も理想の觀念に動かされて起るものなり。

物質自然界の方面も生活現象だけは因果性と究竟性とは並存するを肯定するならん

例へば獲物を驅逐し一物を獲て食し消化するは生活保存の原因なり而も一方より見る時は生活は目的にして是等の官能は手段なり。

蜘蛛は蠅を捕えんが爲に網を張るにあらず。網ある爲に蠅之に捕へられ蜘蛛口あるが故に蠅之に入り消化するなり。此場合に於ては唯だ因果の關係あるのみにして目的なるものなし。

吾人々間は執意と目的の觀念とを有するを以て因果的原則はまた同時に目的原則なりと云ふをうべし、と云はゞ唯物論者は人間と動物との差異は單に程度上の差異にすぎずと主張するに非ずや。

吾人は斷言せん。人間の生活作用は目的手段の觀念の有無に係らず悉く有目的の過程と見做さざるべからず。人間正に然らば倍々程度の上に異にする他の動物に於てまた否定する理なし。植物も營養作用動物と異らず。

若し生活現象の目的の存在を許さば自然界全體に亘つて之を許さざるべからず。

動物界は植物なくんば存在する能はざるなり。植物界はまた堅硬の地殻が物理學化

學の勢力によりて柔軟細微の土壤に變ずるに非ざれば生ずる能はず。尙ほ吾人此土壤が時々絶えず降雨の爲めに濕さるゝことを豫想せざるべからず。然るに雨はまた水が豫め大氣に由て吸收せられ其高層に運搬され然る後温度の變化に依て凝結さるゝにあらざれば降る能はず。水が水蒸氣となつて上騰するには地球が太陽光線のために熱せらるゝ要あり。故に一片の華葉に於ても、全く遊星系のあらゆる配置あらゆる運動とあらゆる自然法との力を以てするにあらざれば生ずる能はず。

吾人若し自然界の一點に於て目的性を認めんか、勢ひ全く自然界に擴張せざるべからず。

普遍的平行論によれば無機界にも内的生活なしと云ふは誤謬なり。

即ち内的世界即ち意志の世界は物質界と廣延を同ふし精神は無機有機を通じて遍満す。

嚴格に言へば物質界に於ては唯物的因果性のみ存し究竟性は此物質界と併行の内界に遍存し單物質界自然過程は徹頭徹尾因果的に説明するをうべく此内的過程は徹頭

徹尾目的論的のものなり。

普遍的並行論は内的生活の存在は單に有機體にのみ限らず萬有に遍滿し有機無機兩界を通じて物質過程を目的論的に見るをうべきなり。

法身

本質と體量

法身の體。内容本質如何に就ては。唯物論者は實在の本質は物質的分子なりと曰ひ。亦た唯心論者は實體は唯觀念體にして物質は妄現に過ぎずと論じ。唯理論者は宇宙の本質は物に非ず心に非ず物心を超たる眞理即ち眞如なりと曰ふ。また物心平行論者は物と心とは一體の兩面にして外觀すれば物質内觀すれば心質にして。若し密教によれば宇宙の實體本質は物心一如これを六大無礙常瑜伽と曰ふ。六大とは地は堅、水は濕、火は爛、風は動、空は無礙、此の五大は物質にして識大は心質、六大即ち物心二元が相依て萬物を成立す。相互に無礙なり。無礙の故に心として觀すれば物も心ならざるなく、又物として見れば一切物ならざるなく物即心なり。物を外にして心作用を現はすなく心を離れて物の用をなす能はず。

六大互に具し地大に他の五大を包含し他の大も亦然り、互に主と成り伴となる。一塵に一切世界萬有を具し一心に十界三千の理を備え、物心一如色心不二の故に常瑜伽と曰ふ。

六大は即ち物と心との二質なり。もと一體の兩面なれども此兩面は同等の位にあらず。心大は眞の實在にして五大は意志に實現せられたる現象に過ぎず。五大は何故に意志の實現なりや、曰く意志は心の力なり。

絶對觀念態が意志に實現せられたる相態を五大となす。堅濕煖動等は質にあらずして力なり。五大は觀念の相なり。寫象と意力を屬性とせる所の絶對精神なりとす。

密には現象即實在とし、華嚴には現象は力に實現せられたる相にして本質は萬有內在と云ふ。

華嚴によれば宇宙の實體本質は一大精神なりとし之を一心法界と名づく。亦た一切萬法を總括せる精神態なれば總該萬有心とも名づく。所謂精神態とは物心相待の心にあらず、絶對的精神。萬象は其實體上の影現に過ぎず。

内容無盡の徳を具す（體具の徳を明す）

上には本質精神態の形式的即ち絶對觀念態また理性態として明せり。

次に内容を明さば密教に所謂胎藏、理に具する所の萬法なり。胎藏に數義あり。一、含藏の義。喩へば母胎に性を含藏して之を見と養ふ如く六大法界體性能く一切の功徳を含藏して失はず。二、隱覆の義。人の胎内に在て其體を覆ふが如く理體煩惱に隠れて顯現せず。

六大は其自體即ち法界體性智、大日なり。此宗には法界體性に人法相好を具すと説く。

此體性に四曼の諸徳具足して闕減なき三密の用大を以て一切の活動をなす。

法界體性は無相法身即ち能生の本地身なり。無相とは遮情の言にあらす是れ表徳の無相即ち萬徳を具して差別の相なし即ち一切の相として具せざるなし。

法身の内容即ち宇宙心靈に内容無盡の性徳を具足するも而も如々態なり。楞嚴には

之を表明するに如來藏妙眞如の性と名づく。藏とは無邊の性徳を含藏するの謂なり。

妙眞如とは而も本體常に一如の義。如來藏性本具十界身心土三千の理乃至重々無盡法を具して缺くる所なし。絶對心靈態は一如にして自然に無邊の徳を備へ一切自己に有し常恒能動のみにして所動なし。人の内容の如くは外界の事物を経験受容して其内容を充たす。宇宙全一なる法身は自己の外に外界なし。故に内容と名づくるも個人の如く受容的にあらず一切本來自己に有して自發的たり。

全體としての内容は外的の刺激を受けず。自己の内部より自發的にして外界より受容するものなし。

楞嚴に曰く、一切世界の五蘊六入十二所十八界乃至一切萬法及び地水火風空見識の大性は本如來藏性にして法界に周徧し。かゝる眞性は因縁に依てなるに非ず自然に在らず。一切萬法は周徧法界の藏性が隨縁循業の發現に外ならず。

華嚴によれば如來本質内容に圓融無碍十佛自體一切事理相即相入重々無盡不可説なり。性起と縁起とは體と用との無碍なり。性に無邊の徳を具し縁に無盡の事を現す。

如來の内容には一切差別性を具存して而も常に一如なり。宛も人の才能ある人格に一定の精神は國家のためにもまた家族の爲にも科學的智識文藝等の複雑なる内面あるも精神其物は單純なり。

凡そ單純にして本來無一物なる精神の如きあらし。而も凡そ複雑なるもの吾人の腦髓なるものにしかざるべし。また宇宙は一切の複雑を包容し複雑の極なる吾人の腦髓の如きも之れに洩れたるものに非ず。一切の複雑は單純なる如來藏性より産出せらる。凡そ其複雑の度は實に重々無盡と云はざるべからず。此體性を如來藏性と曰ひ全一の心態、内に無邊の性徳を具し萬法を顯現すと云ふも歸する處は二大屬性なりとす。一切知と一切能、即ち絶對寫象と意志となり。地水火風空の五大は絶對意志に實現せられたる客觀々念にして識大は主觀的現象なり。故に知と能との屬性を有せる全一の心靈態なりとす。

法身に顯動と不動の二面あり

法身、如來藏性、永恒存在、全體大用、此に顯動と不動の二面あり。永恒常住涅槃なると世界因果生滅の顯動なると、前者を眞如不變と曰ひ後者を隨緣と名づく。常住不動の安立を求むるは前者に依り世界に在て活動せるは後者にあり。此二者何れももと同じく如來藏性の全一にして何の處に於ても如來の中に在りて離るゝことなし。

密教には六大の法爾と隨緣とす。法爾とは法性自然の理體、隨緣とは顯現せる相と用とを云ふ。先づ六大の性徳たる堅濕煖動無礙了別の方面方圓三角また青黃赤等の形色作用。

六大皆な活動し顯現すれば隨緣の世界萬物となり六大本活動的にして常恒不斷遍動せり。此遍動の六大の外に寂靜たる六大存するに非ず。即事而眞。隨緣即法爾。眞如即萬法なり。是の如き六大能く一切佛、及び一切衆生、器界等と四種法身三種の世間と現す。

即事而眞、現象即眞在、事に即して眞、轉變無常なる現象實體が常恒の活動より現はれたる現象なれば全體より觀すれば常住不變なり。萬象の外に實在なく萬有全體即

實在と云ふ。

生滅門。楞嚴に如來藏性清淨本然にして不變にして隨緣隨緣にして不變、則一切世出世の法何れか如來藏性にあらすや。經に曰く、水の氷となる如く佛界即ち九界なるに喩ふ。又云く、氷還て水となる九界即佛界なるに喩ふ。水氷異りと雖も性何ぞ殊ならん。十界分つと雖ども藏性何ぞ別たん。經に曰く、譬へば虚空の體は羣相に非ず、而して彼の諸相の發揮を拒まず。虚空は藏性に喩ふ。七大五蘊六處十二入十八界等の一切因果生滅の萬有を諸相に喩ふ。藏性の體七大に非れば即ち七大も亦た體大にあらず。藏性七大の發揮を拒まず。此故に藏性即萬有なり。萬有は藏性隨緣の用即ち藏性本然不變の體。設し藏性なくんば一切世出世の法あることなし。當に知るべし即ち是れ藏性全體大用なることを。

（法身より天則秩序によりて發揮顯不の二面あり。法身の實體と現象の世界生滅と」法身より天則秩序に世界萬物と發展せられたる方面と」また生滅の世界より不生滅の涅槃界に歸元せると。）

生滅の世界と常住の涅槃界とは超然教と圓具教との二種の見解あり。超然教には生滅變易の世界と常住の涅槃界とは其處を異にせるものとす。涅槃界を或は高遠なる彼岸に在るものとす。圓教には娑婆即寂光この世界と涅槃界とは處を隔て求むべきに非ず。吾人が業識の所感は現感覺の世界にして佛眼所觀を清淨土とし凡夫肉眼の所見と佛眼の所照とは同一體の兩面なり。

感覺世界は有限にして觀念界は無限なり。此無限なる觀念界に常住の涅槃界を求む。圓教の涅槃界は所住の處に拘はらずして精神の如何にあり。若し凡夫の業識の所感によらば一切處として生滅世界ならざるなく、若し業識を轉じて全く精神が如來の中に依る時は處として寂光土ならざるなし。

故に法華經に、佛の曰く我は三界の如くに三界を見ず如實に三界の相を知見すと。又曰く、衆生劫盡きて大火に燒るゝ時も我が此土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の堂閣種々の寶をもて莊嚴せり等。

密教によれば現象世界は大日法身より流出せる萬象、一切諸佛尊天は森然として嚴

存す。

宇宙全體同一の大日なれども法身は密嚴淨土に安立し、報身は十方淨土に居す、應身は欲界の淨土に居し、等流身は人天阿修羅等に等流現す。

大日の淨土は自性法界宮密嚴國土と稱す。十地等覺の菩薩も如來の加持を離れて猶ほ見聞の境界にあらずと。然るに如來如實に自心を覺悟して本有莊嚴の淨土を開顯し十方諸佛と共に居す。其不可思議の境界を自性法界宮また密嚴國土と號す。淨土二あるにあらず。大日如來一心法界本有莊嚴の淨土なり。

華嚴によれば圓教の佛土三類を立つるなれども悉皆華藏莊嚴世界、淨穢融即、相即相入、一多無礙、一微塵無量刹、塵々皆法界、此一塵を離れて華藏を求むるなかれ、一切顯動の萬物の中に寂靜の涅槃界、圓融無礙、重々無盡、諸佛華藏界中に在て凡夫自ら穢土を見る。穢土に即して淨土淨土に即して穢土亦相容無碍。

華嚴に淨穢圓融を説くとも宇宙其物に之を觀る衆生に十佛の自境界は相即ながら凡夫の爲めには超絶界なり。超絶と云ふも超然主義の超絶に非ず内在的超絶なり。

絕對無限の神性と有限の自然とは同一視すべきにあらず。世界は如來の中に没入するも如來は世界の中に没入せるをえず。

圓教に相即相融と云ふも現在の世界を即如來の圓滿なる眞境界と云ふべからず。如來の境界は絕對無規定にして世界は相對規定、また如來の境界は眞善美等の靈とし世來は然からず。

如來の中に在て自然に規定せらる。若し如來の爲めに攝取せられて心靈開發する時はこゝに在て如來の中に安立することを得。

穢土淨土は本より世界其物に關するにあらずして如來中の世界性なれば如來の恩寵の光によりて心靈開發する時は娑婆に即して淨土を觀る。

（華嚴生滅門法界緣起。法界眞如自性を守らず隨緣して生滅となる。生滅の本體本不變の自性なれば隨緣して生滅の諸法と成ると雖も而も自性を失はず）

生産門（縁起門）

（頌に曰く、生産門には一切の云々）

法身はいかにして宇宙萬有を開發せるか。

或は唯一の神の權能によりて萬物を創造すと。神は超在と汎神とあり。具教には汎神にして萬有内在の神の力によりて開發せられたる萬法とす。

密教に法爾の六大は皆活動し隨緣して萬物と成る。六大の本性は常恒に活動し六大即ち物心の二元が相頼つて萬物成立し相互に無碍なり。此六大が法爾隨緣によりて有情非情種々差別の相を呈す。物の性用に差別あるは識の作用を有するが故なり。亦た精神に思慮分別等の種々差別を生ずるは物質に種々の性用具するによる。

無碍の六大が相依つて一切色心萬有を造る。萬有は六大より成立て主伴無盡の關係を具有し因縁相待つて萬物を造作す。

萬有神教は法身の大日なると共に一切塵にも悉く大日一切物々としてビル法身なら

ざるなし。吾人が一活動物なると共に一切の筋骨個々の細胞に至る迄で一として活物ならざるなきと同じ。

蠢々たる蠕動の類も皆大日の分身として造化の用をなす。人いかに化學が發達せるも人力を以て一の蠕動を造ること能はず、前の原形質より分殖す。故に人は人を造る造化の用あり。蛙は蛙を造る自然の用あり。

緣起門に三性として絶對の法身と因緣相待なると各個體の自發的との三性を要す。

絶對なる法身直接に一の動植物を造化するなし。一切の有機物は自己に原形質の分殖作用あり。例せば人の兒は人の所産なるが如く些少なる一草も其原形質なる核果より分出す。故に各個體を小造化と云ふことをうべし。有機物の自發的產出は夫より以上の因緣の相關により因緣相關は其統一根底の全體の力による例せば太陽の關係を離れて草一本も生活することあらざるべし。故に各個々皆大日とし小造物とするも之を統一の大系統たる總體の大日なかるべからず。

總體の大日を學語にて云ば一大精神と名くべし、此に體用相の三大あり。

生産門。宇宙萬物の縁起を説くにキリストは神の意志とし儒道にては萬物と人と皆氣と爲とす。

佛教。近くは前生の業力縁起、阿頼耶識縁起。阿頼耶識頼に根身器界種子を變じて能く自分の所縁を變現して、我法分別薰習の力の故識生時變じて我法に似たり。六七二識無明覆ふ故に執して實我實法と爲し、之に執して業を造り生死窮りなし。故に其他の萬物識を以て本とす。

起信には眞如縁起に　謂く一心眞如自性不動なれども他に隨て動轉して諸法の自體而も各異に似たり。平等を動かさずして差別をなす。心生滅門とは如來藏に依て生滅心あり。隨染本覺、自性の不動を失はずして他の無明薰習するに隨て變じて業轉現の種々の差別の相を成す。經に不可思議薰、不思議變、是現識因なり。藏性隨他動の義、譬ば濕性の水是自性不動にして濕性を失はざる故に隨風の波是隨他動の義變動波浪の故に其起る波の風は是れ自性動の義あり。能動水の故に一心の義、亦復如是。自性不

動にして隨他の故に猶如凡夫澄一心源之時身隨他動の凡愚を具して四智圓明の正覺を成す正覺の智に依て自性動の無明を滅す。風止む時波即ち水に歸し風是永滅す。

歸趣——終局目的——攝取門

攝取門には法身と、般若と解脫の徳をもて、衆生の心を擇みては、開化し終局に歸趣せしむ。

攝取門とは還滅門とも云ふ。宇宙に天則秩序の理性に世界萬物を向上し生命過程を進化する理性の存在することは終局目的に歸趣せしむる方便なりと云ふことをうべし如來はいかなる設備をもて終局目的に參與せしむや。

一切衆生に本能的に佛性を具有せるは終局目的の豫備せるものと云ふべし。衆生靈性具備せるも天然の人は無明に覆はれて自ら之を開發顯示すること能はず。此理性は本有の性徳にして修成にあらず。

如來はいかにして終局目的に攝取し給ふやとならば、密教には大日本地身より加持

身を出現し本尊の三密と本來平等行者の心中に涉入相應し本尊三密行者の三業を加持し感應道交の故に有漏の五蘊と本尊無漏の三密との涉入相應により眞理を開顯し荆棘瓦礫の穢土宛がら衆寶所成の無漏の淨土の實相を開覺す。實は己心本具の曼荼の淨土なれば行者不往の相に住して自心の淨土に往生し本尊は不來の相にして而も己心の衆生を攝取し給ふ。

成佛とは法爾所成にして因緣所生の成にあらず。大日とは是れ衆生の本覺、今此本覺を了するを成佛と云ふ。

眞言行者曼荼羅を體となし三平等を宗とし三密を行とし金剛寶藏を開顯し心の佛國土を嚴淨し遮那覺位を證す。

法華經の意によれば釋迦牟尼佛久遠劫實に成佛せしより常に一切世界に於ても說法教化す。其中間に於て燃燈佛等の名字の不同年紀大小を説いて亦涅槃を現し種々に方便して衆生を度す。或は己身を説き或は他身或は己事を示し他事を示し言説する處皆な實にして虚しからず。

有佛無佛性相常然、如來法身の法般解の三徳の性能は法界に周徧す。是れ則ち衆生を終局に攝取の理性なり。

法身如來の性能たる三徳の理性は本來法界に周徧し之に接觸するもの知見を開き解脱變化の益を蒙るべきなれども衆生無明に覆はれ自然に因果律に規定せられ自ら此徳性に參與すること能はず。如來の智慧自在の力より報應二身を出現し衆生を攝して涅槃界に歸趣せしむ。

即ち因には法藏と名づけ大願大行を起して衆生を救済の誓を現じ果には十劫正覺の佛身を示せり。即ち盡十方無碍光王如來と名け、所有一切の萬徳を聖名に表し、至心信樂の回願心を攝して已に亡びたるを復活し目的に攝取す。

また應身を示して人類を教化度脱す。十方一切諸佛賢聖は衆の爲に佛知見を開き佛の正道に悟入せしむ。即ち終局目的に歸趣の理を示さんが爲めに出現し給ふなり。

論註に如來に二種の法身あり。即ち一、法性法身、二、方便法身。法性法身は本有の佛身なり。

如來の體用は本より法界に周徧せるも方便法身之を示すにあらざれば衆生之に關すること能はず。

智論には佛に二種身あり。一法性身と二父母所生身となり。是の法性身は十方虛空に滿て無量無邊なり。色像端正にして相好莊嚴せり。無量光明無量の音聲あり。聽法の衆も亦虛空に滿てり。此衆もまた是れ法性身なり。生死の人の所見にあらず。常に種々の身種々の生處にして種々の方便をもて衆生を度す。常に一切を度し須臾も息む時なし。是の如き法性身の佛なり。能く十方の衆生其の諸罪報を受るを度する者は是れ生身佛なり、生身の佛は次第に說法すること人法の如し。又云く法身佛は常に光明を放つて說法す。罪あるを以ての故に見ず聞かざること譬へば日出づれども盲者は見ず雷霆地を振へども聾者は聞かざるが如し。是の如く法身は常に光明を放つて說法すれども衆生無量劫の罪垢厚重なることありて見ず。また明鏡淨水面を照す時は即ち見垢翳不淨なる時は所見なきが如し。是の如く衆生の心清淨なる時は即ち佛を見る。若し心不淨なる時は則ち佛を見ざるが如し。

法身とは密家に云はゞ金胎不二、理智一體、是法界の體性なり。此體性に無邊の性德を具して衆生の身心の體となるも衆生は之を知らず。自己本來大日たるを識らず。

法軌に則りて正覺を成ず。

般若は如來の一切慧。密には五智の光照常住三世暫くも息むこと有ることなき平等の智身なり。五大所成の智三密三身。

大智慧光明、處として照さざるなし。斯の智光一切に洽ねく此光によりて心靈を開發し、一切慧が自己の心靈の窻開かる時即ち佛知見を開く。一切慧に四種あり、即ち四智なり、

大圓鏡智は一大觀念態なり。即ち主觀客觀の一體なる觀念なれば人の靈性開發して此鏡智と相應する時自己と法界と同一の大觀念態なるを覺る。

平等性智は絶對理性なれば斯智と相應する時は吾人の心靈内容と即如來性智の本性と本來一體。肉の情を脱し如來大我と融合し而して如來眞理の光自己の心靈に徹照し斯靈智より本來我執を離れたるが故に如理の知見なり。

妙觀察智の德により生佛感應、相即相入、事々無碍の妙用より衆生の意識を感應交渉し、三密加持神秘の妙用によりて人々の知見を開示し大我に融合せしむるは斯の智用にあり。

成所作智は衆生の感覺性を美化し微妙の感性清淨國土の莊嚴を成せしむ。

如來般若の德によりて自己の心靈と相應する時は四智圓明。即ち本覺の一切慧と初覺の心靈と現じ來る。密家に所謂る金剛薩埵一切有情の心質の月輪が月の初日より日々漸く加て十五日圓滿無碍なるが如し。瑜伽行者の三業と大日の三密と相應白淨月の圓滿に五相成身を成し無上菩提を證し金剛の身をえて、五相具さに備れば方に本尊の身を成す。其圓明は即ち普賢の身也。亦た是れ普賢身十方諸佛と是れ同じ、亦た三世の修行證に前後あるも悟達に及び己れは去來今なし、凡夫の心は合蓮華の如し。佛心は滿月の如し。此觀若し成じぬれば十方國土の若しは淨若しは穢六道の含識三乘行位及三世國土の成壞衆生業の差別菩薩因地の行相三世諸佛悉く中に於て現じ、本尊の身を證し普賢一切の行願を滿足すと(菩提心論の意)

解脫——解脫の徳は一切衆生は世界の因縁に規定せられ業に束縛せられて感情及び意志の束縛をうく、斯の徳性に即ち一切慧と能との徳によりて衆生の感情及び意志を解脫靈化して如來の中に自由を得せしむ。

衆生を解脫靈化する性能を三種に分つ。

一、神聖、眞理の光無上の権理ありて人の心靈を照し道德自律を規定し。

二、正義としては己を犠牲に供し積極的には聖意の目的に隨順して靈的活動をなさしむ。神聖は自律的に道德の司導とし正義は六度八正等の職務をつとめしむ。

三、恩寵としては無明に盲ひたる衆生に佛知見を與へ心靈を復活し心情には如來の内容に融合し意志を靈化して心靈を更生し有餘の依身を有しながら神は涅槃界即ち淨土に安住し、如來司導の下に行動し壽命盡くる時は正く報土即ち無餘涅槃界に歸し、無上正覺を成じて無住所涅槃に住して未來際に衆生を度す、之を終局目的とす。

已に終局に歸る時は本覺始覺と一致す。

萬有生起論

宇宙萬有は云何なる者の手によりて成立せしものなるかを論ず。萬有生起の論につきては古來唯物論の見解あり唯心論あり唯理論あり。

斯教は法身に一切知と一切能との屬性ありて天則秩序に一切を展開し生産せるものとす。外觀には相待的因縁因果の律として成立す。

唯物論者は、自然現象の中には生物の精神の如き一種奇異の質を現する物有れど其は物質の變態に過ぎず、宇宙の本質は唯物にして此に自然律がありて物理的に萬有は構成せらる、故に萬有の生起は唯物質の自然律に萬有を生起すべき性能ありとの見解なり。唯心論者は宇宙の本質は觀念的にして物質は唯現象のみと、故に萬有の生起は唯心の所作なりと、唯理論者は眞如法性の理によりて萬物は成立せらるると。

支那儒道の二教は人の原因を説明するに、近くは父母及び人類の祖先を原因とし遠くは大道元氣自然の法によりて天地萬有を生起すと。斯二教の如きは單に萬有の生起を研究するに形氣の方面のみに局るが如し。

猶太基督教には超自然の天父ありて自然萬有は其神意に由て生起す。神意を注ぐが故に萬物あり。被造物には自由を得ざるものとす。

佛教に於て教に淺深あり、不了あり、不了義教は未だ萬有生起の一大原因を究めず唯圓滿なる了教に於て全く生起の原理を盡せり。

若し佛教の淺教によれば萬有生起の原因は各自の個々の業即カルマなり。各自の業作が各自を造る因にして自の業力が自己の身心を造る。また此世界は一切の生類が共同の業力の所感なりとす。

唯識論によれば各自のアラヤ識を根本とす。アラヤ識は色心萬法を包含して、此識によりて見分相分即ち主觀の精神も客觀の物象も悉く唯識の所變なり。此識無始以來

暴流して生死に轉展す。萬有の生起はアラヤ識なりとなり。

今日く唯物論者の萬有の生起の原因を唯物に歸せば無は有を生ぜずの理に基かば物質を原因として精神てふ結果いかにして生せん。今人類の身に就て檢せんにも物質の身體の運動知覺は精神に因て然るが如く觀じらる。然らば萬有の生起を物質に歸するよりは寧ろ精神に歸するに如かざるが如し。

儒道が元氣自然の道法を以て萬物生起の原因とせば元氣よりして人の内的生活の精神的原理知情意の如きの原理を説明し得るか。また自然にして生ずとせば萬有には必ず因縁果報の相互の關係ありて自然に生起すとの理を明めず。故に大道元氣を體として自然より生起すとの説は未だ生起の原因を説明するに足らず。

猶太基督二教の神意生起原因論は神にのみ意ありて直接造化し萬有には生起の原因あらずとせば一切の有機物各自に生起の作用によらずして直ちに神の造作を發見する能はず。故に個々の罪惡も神に歸せざるを得ず。故に神惡論起る。斯説も亦生起の原

因を究めず。

佛教小乗教は萬有が各自自己の業力を生起の原因とし業力の體を明さず。力は體による體なくして力ある理あらんや。唯識家は業力の源なる體あり即ちアラヤ識を原因とす。然るに小乗の業力と唯識のアラヤを原因とするは自己の個體を原因として個體の根柢たる一大本體を明さず。個人と及び世界には此が根柢なる一大本體なかるべからず。此本體を明して萬有生起の理を究竟せるものは圓滿の教なりとす。キリスト教の萬物の體たる神と小乗教の各個の業力とを統一し綜合したる大乘佛教によりて始めて究竟せり。

華嚴密教等は圓滿教に屬す。若し華嚴によれば萬有生起は如來藏性が總該萬有心即ち一大精神が萬有の本體にして此を一心法界と云。此に隨緣不變の二面ありて、一面は常住不動の眞如の體にして一方は隨緣の活動。萬有は眞如自性を守らざるが故に衆生界に轉じて個々の心識となる。是を衆生心と名づく、衆生心は全體心を根柢とす。

衆生心能く一切萬有を造作す。經に心は譬へば工なる畫師の如く能く諸の世間を畫き五蘊悉く生ず。若し人の心行が普く諸の世間を造るを知らば是人は即ち佛を見佛の眞實性をなしたるもの也。何となれば心と佛と衆生とは此三差別無ければなり。又曰く三界を了達するは心に依りて也。十二因縁復亦然り。生死皆心より作す所、心若し滅すれば生死盡く。

若し密教によれば宇宙を構成する一切の物心二質は本色心不二の大日金胎不二の大日六大周偏して宇宙常に常恒不斷の大日の所作ならざるはなし。全體神が大大日なれば一轉したる個々は其一分なれば一々皆大日ならざるはなし。各個の小大日は本大日を本體として不可離の關係を以て大大日が萬有の本體にして萬有生起の源なれば小大日焉んぞ其作用なからん。宇宙全體は大日にして其分たる太陽系も小大日なり地球も大日にして地上の生物各大日の色心ならざるはなし。故に萬有生起は各小造化なりとす。一切衆生自己大日たることを自から覺らず自ら三界六道を造りて自から苦樂の夢

を感ず。

今日く宇宙唯一の法身の手によりて成生したる萬有なれば大は宇宙全體より太陽も地球も所有萬物もいかに微細なるも一切の個體は一大法身の分身なる個々なれば、個々は小法身なり。斯小法身は不可思議の妙用ありて各小造化なり。大法身の法則に則りて其分に應じて造化の知能を有せり。太陽は太陽の造化の用あり地球もまた造化たり各個々もまたいか成る么少の生物にも具有せり。然れども法身の理を離れては太陽と雖も造物の用あるなし。此天則に則る限りに於ては么少の生物もまた造物の一員として而も小造化なり。人類の生殖の作用を外にして人は生起すべきものに非ず。一切の動物に於ても植物に於ても各自は其元形質に自己の族種を生起すべき本能を有せり。故に各個體は天則に則りて各自小造化なりとす。各個體は自己に四支五官を自造し自ら活動し自ら生存するの作用を有し、自ら視聽嗅味し自ら知覺し運動し經營する

の妙用を有せり。自ら食ひ養ひ生殖の用をなす。しからば有る人が個法身の萬物いかに微細なるも神を宿し能はざるほどの微細なるものはなしと。

質料と秩序と作用

法身如來藏即ち一大精神に一切知一切能の機能ありて萬有を生産せりと。

宇宙は絶對心靈にして絶對觀念と理性と意志との精神態によりて萬有を生起すと。

萬有を構成する六大性は本然とし周偏す。即ち物と心との大元素が法界に存在し業に循ひ縁に隨て萬有を變作す。六大とは如來藏心の二屬性絶對觀念と絶對意志と即ち一切知と能となり。一切の色心の二象は本絶對觀念の相待的現象にして其萬物の堅濕煖動は觀念の客觀が意力によりて活動する現象なりとす。

萬有の質糧は客觀々念態にして意力によりて堅濕煖動等の作用をなす。一切知と能によりて萬有を建設し一切知は萬有に内存し天則秩序として時間空間の形式に因縁律

に規定し、大にしては天體の星宿の成生及び運動に皆秩序の整然たるありて地上の萬物起伏生滅に至る。

自然界は客觀々念が意力に實現せられるゝに一切知と能とによりて世界を建設すると云ふ如く、一切知とは一切作なり。いかにとなれば法身は一切知は一切萬有に内存して萬有造化の觀念が一切を造作し之を造作する絕對意志の爲に司命者として秩序を整束す。一切知は天則秩序の理性として萬有に含蓄し萬物を統一し宇宙全體が全一の身體にして萬有即ち自己なれば法身一切知は萬有の世に在つて萬有を造化す。

萬有は表面には個々孤立的に觀ゆるも根柢に於て統一的理性あり。故に統一的系統ありて萬有は不可離の關係を有す。

萬有が統一的理性を根柢とするが故に宇宙全體の力に依らざれば萬物は生起すること能はず。總體としての宇宙は空間に無限に時間無限永久自動自活自養と消耗とは共に自己にありて天則的に常恒に建設的衝合行はる。永久自動自活して無窮なり。空

間を盡して遺すことなく時間を窮めて休止することなく造化の妙用を施す。

譬へば人の精神に理性完全せざれば造化建設に秩序の全を得ざるが如く、自然界の萬有の生起には最も完全なる理性なかりせば爲し能はざる巧妙を以て生物を造作す。大にして天體の星宿より小にして地上の微少なる植物の根莖枝の末端に至るまで其完全たる造作の巧妙に至つては一切萬有に存する理性智の存在を否定し得ざるべし。また一切の萬有の生起には自活自發的にして自己に其形式を形成す。其形は外部よりの規定を待たず。萬有を造化し生起する法身の妙用は其秩序の整然たる盲目的運動の結果の如くなる形跡毫も發見すること能はず。由此之を觀れば藏心に一切知一切能の理性存在を謝せざるべからず。

性起と緣起

萬有生起を説明するに全體より見れば萬有に各自を統制的に自發的自ら形成せる性能存せり。之を性起と云ふ。詳く説明せば萬有は自己に本能に自己を形成し統制し自己を造るに自發的自活的の性能ありて外部によらず縁を待たずして而も自ら成制するの性能あるものとす。例せば植物の種子に自己の原形質より生産し増長し自己の形を作り根莖枝葉に至るまで、外界の其模塑によりし形成せられたるに非ず、其模塑は自己にありて自發的に自己の本能より自己の伏能を開發し自己の天性を發展する性を有すること、また人類にしては人の初めて妊りたる胎兒に人類としての四支五臟六腑の機官より乃至其官能より精神能力に至るまで自己に之を成形しまた智力情意の顯動すべき性能を自己に有せり。其本能の伏藏は外界より之を形成すべきにあらず。性起の理を進化説に應用せば人類の元祖は他的高等動物より進化し高等動物は劣等動物より乃至展轉して生物原始に遡る時は實に么少の生物なり、凭る微少なる生物より性起して無數の階級を経て進化したる人類なりとば、彼の原始生物に已に人類と成り得べき

本性を伏藏せるものと言ふも不可なかるべし、然らば乃ち人類にして心靈開展せば聖者佛陀と成り得べき本性か生物の性に伏せるものと爲すも否定すべからず。

萬有は内性自發的にして外部より之を形成し變度すべきにあらざれども、また外部より之を養成すべき助成機關を與へざる時は生起すべき能はず、之を因縁論とす。

因縁論

萬有は自己に自活自發的形成の性能あるも、自然界の萬有は因縁所生の法、物獨り成立せず必ず相待規定を免れず、因縁により相待て成立す。大にして天體の地球は太陽系に繋れる一切の惑星相互の關聯を離れて獨り存在すべからず。此太陽系は又他の太陽系と連絡し因縁相絡りて空間に遍在し時間的には因果相繋りて永久に相續し、また地上の物は太陽力の因縁を離れて一個の生物も生存すること能はず。

一個の植物にしても雌雄の因縁を離れて能なく、また植物の種子を造化する能はず

また植物の種子あるも土地と水と熱との資縁を缺ぐ時は生ずること能はず。

すべての動物は植物との因縁營養によらざれば生存する能はず。地上の萬物は相互に因縁相待つて相資け相成す。之れを因縁所生の法と名づく。因縁より成るものは時間にも必ず結果生ず。一の植物の雌雄の因縁相寄りて其結果として其種子を成す。また種子を元因として萌發し根莖枝葉の花咲き果を結ぶは是結果なり。斯の如く因縁因果の關係は萬有生起の縁によりて種々に變化す。此に依て因縁論起る。

緣起論

如來藏心てふ宇宙全體が物心不二の絶對心靈態である。全一の心に意志と寫象との二屬性を有す（人の精神に知覺と運動とある如く）。藏心の絶對より相待の自然界を現出せるには二屬性意志と寫象は是一切能と一切知となり。一切能は一切物質を運動生活々動せしむる用あり。此二性は宇宙全體に亘りて徧せざるなし。萬物を生活々動せしむるは能力にて萬物を成立する秩序を整へ條理をなすは一切知なり。視よ大にして天體の星宿循環運動より小にして地上の有機物動植物の生理悉く理論的に條理を齊て各有機性を備へ生活々動す。是悉く其本源は藏心一切知と能とか徧滿すればなり。

藏性絶對より相待の世界に發展せんに秩序をなす一切知は離れざるも先づ一切能の力にて絶對より相待に向て發展せられたり。（本より末に向て、本體より現象に向て）

起信に眞如生滅に縁起の相を演べて心生滅とは如來藏に依るが故に生滅の心あり不生不滅の眞性と生滅の性と和合して非一非異なるを阿梨耶識と名づく。記に、不生滅の藏性が無明の風に因つて動じて生滅と作る。不動の水が風の爲に吹れて動水と作る。動靜殊と雖も水體是一。自性清淨心が無明の風に因て動じて生滅と作る。生滅の萬有には別に體あるに非ず。不生滅の藏性が體として無明に因て生滅と爲る無明は倒執は浪を起す猛風の水に非ず浪に非ざるが如く無明は本其體なし法性本淨無明何に依て起る。

古來無明と本體との區別確乎として認める説なきがごとし。

今日く、藏性は宇宙本體物心無碍の心態にて其屬性一切能即ち一大意力が相待自然界に向て發展產出する能力なり。動じて生滅と爲す力なり。本來意力は不識的にして運動せしむる性なり。力なるものは運動を掌る能の故に。然れども絶對には兩性離れざるが故に一切知伴はざるなし。是萬物に條理の存する所以なり。能展なる藏性は無

明なる盲動にあらず。若し能展なる藏性にして一切知有せざらんが所展なる萬物に秩序も條理の性も存する無けん。然るに萬有悉く秩序あるは是藏性が盲動にあらざる證なり。

所展たる自然界の萬物は即ち藏性より產出されたる子なり。子は親の如く知はあるも潜伏能なり。故に子の方に一切知の分賦たる知が伏能にて一切能の分たる不識意志の運動のみ活動するを無明と云ひ。無明とは衆生が有する生理衝動の事なり。

信論の藏性を動かす無明の風と云ふ。絶對の藏性に何れよりか無明と云ふ風が發すべきか。其發動の處を發見すること能はずして古來妄霧の裡に彼は形を隱せり。

今日く、其無明は佗より發したる風にあらず、絶對心の屬性たる一切能力即ち意力なり。不識運動の性なり。此能力が萬有を發展し運動し活動せしむる原動と成るなり。絶對心の屬性である人の運動活動意志と同じ物なり。

人の知覺も運動も其性は異にすれども同一の精神の屬である。精神も意識的のみに

あらず不識的精神あり。

今宇宙全一の徧動力一切能が不識的に常恒に運動し世界と發展し世界より三展して生物界と轉じて生活々運す。悉く絶對意志の分運動に外ならず。

第二展、世界相待性

信論に、不生滅の眞心と生滅の妄心と合したるをアリヤ識と名くと。

本來の全心が無明の風に動せられて向末隨縁して生滅の世界と現出せしなり。

信論には第二の相待世界性を立てず第三の衆生性を論じ、衆生性がアリヤである。

今は第一の神は絶對實性なれども一展せられたる世界自然界は即ち相待的に因縁因果の關係を以て萬物規定す。絶對は時間空間に超絶なり。展せられたる世界は相待的時間に三世乃至十世を爲し空間に四方上下等の十方を立つ。之を世界性と云ひ即ち時間空間の形式に相互に相待的の關係を以て萬有成立するの謂なり。

視よ天體が横に空間を盡して有ゆる星辰が相關して網狀をなして列羅せるは之と因

縁の相關にしてまた過去の際より此世界の星宿は因果的に先後開避し交迭して鎖狀の聯絡をなし、萬有は本體の全一根柢の上に立てる萬物なれば相互の相即と能力の相入とは相離るゝと能はずして世界をなす。

物心二現

全心の二屬性、意志と寫象、一切知と能とは世界の物質心質との二面に現じ意力は物體を運動し活動し生活せしむる能力とし、知は内的生活のすべてを掌る。

唯物唯心は生産と歸越

全一の二屬性が世界に現じて二象と爲りて主觀客觀、即ち物質と精神、外的と内的となる。

一切能は萬物の物質運動の力即ちエネルギーとして萬物に存在して運動をなす。一切

知は萬物に存して秩序をなす。古來唯物論者は一切能の方面なる物體中のエネルギーの實在を信じ宇宙の本體は物的にしてエネルギーのみ存すと。宇宙を一切能の方面より論するを唯物論とす。

内的生活の寫象の方面に即ち一切知の方に重きを成して宇宙の體を論するものを唯心主義と云ふ。

支那道儒二教も唯物主義と同じく宇宙本體萬物の生起を自然道法一大元氣と云ふ。

一大元氣より陰陽の二性と成り乃至一切萬物を發生すと。

一大元氣とは全體心の一切能即ち不識意志に外ならず。唯物論者と同一觀念なり。

宗密禪師は此道儒の發生に對して一大元氣自然に則りて萬物を生成すとなれども、萬物の生成は必ず因縁因果の關係を離れて生ずべきにあらず、亦萬物生起の元由を説明せんには必ず因縁と因果の則に本つきて研究せざるべからず。然るに道儒二教は因縁の理を無視して發生を説く故に實は萬物の生起を明にする説にあらずとなり。

唯物家は萬物が發現生成する方面に重きを置き生物の生理的生活を本となして宇宙を説明す。吾人が生産門の方に唯心家は精神生活が重をなし宇宙の終局歸趣を旨として其觀念を以て宇宙を觀じ自然と唯心論となる。

唯物家は宇宙が現に萬有を生成せしむる生理の生活は物質即ち能力が本なれば、其本源なる宇宙の本體もまた吾人の身體と同じく唯物質的原子のみならんと。唯心家は人生の目的は心靈が永遠不滅の神の國を期して生存するものなれば宇宙は吾人の希望を充す心靈を以て本質とすと。

今日く、此兩主義は甲は一切能の萬物を發現する方面を説き、乙は一切知により神の本質に歸するには知光によりて歸本すべき方を論ず。生産歸趣の兩面を分擧したるに外ならず。

第一の藏性と第二の因縁性とを區別し

五蘊、六人、十二處、十八界、地水火風空識見、の七大は此相待の自然に於て一切

衆生界を能造する處の元素なり。此元素は本來宇宙に存在して、此元素が自然律により因果に規定せられて一切の階級に亘る。草木または動物を造作する。要素は本來普遍性にてあれば此要素は何人も之を需用することを得べきなれども、自然法と因縁の關係によりて同一の元素を以て被造物の生物と成りては十人は十人百人は百人種々の性質相貌等を特殊的に成す。

斯らば世界自然の生物を造作すべき元素は本來世界相待の現象するものゝ、其本元に歸一する時は、如來藏性妙眞如の性、本然として法界に周徧し、湛然清淨の性に於て因縁と自然より成りしものに非ず、自性本然の性が寧無方所但だ循業隨縁の發現なりと。

今日く、第一の本來清淨の如來藏眞如性が相待世界に現象して、五陰六入十二處十八界七大本性的第二因縁性と現する第二の普遍性か、第三の衆生性は五陰の身も心も乃至地水等の同一の七大本性的の身心を造作する要素を以て、種々の因縁の關係上、植物

界にも種々の階級科種類となり同種の植物にても個々各別々の相狀となり、また動物にも人類にも同人種に身體の相貌性質等悉く特殊的に形成せられて一として同一なるはなし。是複雑なる因縁の關係によりてなり。

楞嚴に三性を區別せざるも、自から絶對本然の眞性が循業發現の世界五陰七大性となり、此が要素として衆生界に造られし事分明なり。然ども楞嚴は本五陰等の現象性を分別妄執として之を排除し、進て本來の第一義を發悟せんとの目的より説きしものなればなり。

此の五陰乃至七大性等は物心の二性に歸す。

楞嚴は此五陰六入十二處十八界七大等は因縁和合虛妄に生有り、因縁別離すれば虛妄の名滅、生滅去來は其實は本如來藏常住本有不動周圍妙眞如性眞常の中に去來迷悟生死を求むるに了に得べからず。

楞嚴に、阿難が是義を問ふ。世尊よ曾て楞伽山にて大慧等の爲に斯義を敷演し玉ふ

彼外道等は自然の法に本づきて説明す。なれども我は因縁を説く。彼境界に非ずと。然るに今本覺の性は本有自然にして非生非滅と。一切虛妄顛倒を遠離せよと。因縁に非ずとすれば彼自然と何ぞ異ならん。

佛の答ふ意は、第一の絶對眞性を因縁所成に非ずと云ふものの、彼らは世界の萬有を自然と説く。故に萬物は因縁の所成と見ゆるに非ずと云ふ。今いはゆる本然とは萬物を絶したる本然の眞性を指したるなり。故に藏性妙眞如性は自然に非して因縁所成に非ず本有の妙性なり。

今學語の便利上世間に自然と云ふ世界因縁所現の萬有につきて、今もまた自然律は必ず因縁因果の規定を離れず此自然法因果律は第三世性を説明する學語より今も隨順して用ゆ。

自然が自然の要素を以て萬有を造作するに因果律に成立し此因果の上に第三の衆生性が三展す。

衆生性の緣起論

衆生性は極少より發生す

今暫く現世界の分たる地球上の生物發生の原始を進化説によりて見れば極めて微少なる最微少なるアミンバを以て發生の原とすと。

單細胞其元素も單純。

一切衆生は最大絶待なる神性の分現とすれば極大なる神は自己の分子を原始に何故に極少とせし哉、答へて、神意測り難し極少より漸次進化し極大に協はしめん爲の順序不可思議。然れどもいかに原始の生物が微少なるも神意の微に互るに接ぶべからず、有形の極微は無形の心質を宿すに 近す。

生物進化の原則

生物が原始の極微極劣極素より向上し進化するに因縁に生物自身に同自性として神の分子たる靈性具有せり。一切知の分たるとまた一切能の分を有せり。此靈性潜伏が自發的向上の因縁となりまた宇宙に萬有の自性を發達せしめてついに攝取せんとの求心力存せり。之が緣力となり自己の靈性伏藏が顯動態に爲らんとの勢能と神の求心力との因縁によりて萬物は進化す。

此進化の過程は人間個人の考より見れば實に極少なる生物より無數の時間と階級を経て神人合一の時期に達する時間をいかに減縮して之が目的を達せしめば可ならんとおもふも、斯廣大なる設備を以て順序を経るは自然因果の規定にして之を潜越すること能はず。

生物進化の元理は靈的伏性を顯動せんとの自發的なる萬物相互の競争とまた神の求

心力との因縁によるものとす。

一切知と能

神性より三展したる衆生性は神が萬物を現象界に發展するは一切能力エネルギーなり神には本より無明なく一切知一切能との理を以て萬物自存として造化す。所展の子は一切知の分たる知性は伏藏して物理的の生活を爲す。一切能の分が先づ發動す。されば原始の生物また胎兒も不識意志の働ありて生存す。

人もまた生れて幼稚の時代は不識的に生活運動す。内的生活の精神は漸次に發達す感覺にても觸覺等が先に働き何にしても肉の生活の便利と生理の則に則りて發達することし。感覺知覺感情理性等他の動物と共通性なるは先に發達し人間的の要素なる精神は漸次に後に發達す。

物理的の身體生活は手段にして一切知の分たる靈知開發して神の本性に向ふて進む

は目的なり。

世界及衆生の發生せる時は知は伏能にて能力は先發動し、能に知は隨順す。されば一切の生物が未だ靈性開發せざるほどは只肉の生活の爲に全力を盡くし、知は只肉の生活を計るに過ぎず。故に衆生的の知にして靈知にあらず。

不識意志の生活よりまた人類の肉の生活意志は神の一切能力にして是を生理衝動と云ふ。一切の生物が自己を保存せんとの勢力なり。即ち活きんとの氣、是が人類の進化、肉の我、生理の我、自己の保存の養分もまた生殖の作用も悉く生理の本能として存す。

大にして一切能一展して天地陰陽の元氣となり三展して生物の生理衝動として大より小悉く一面より觀れば宇宙一切の生物を生理的に生存せしむる能力の存在するを見る是唯物論または元氣陰陽論との主義とする處是また手段として最も必要なり。故に此方面に重きを爲す論者は生殖作用を神聖視し神の掟とし造化の妙用とす。是また理

なきに非ず。然れども若し神の目的たる靈性開發し永遠光明に歸する道を未だ意識せざるはいまだ階段にして宇宙及び自己靈性の伏在を認ざるは遺憾なり。

亦一方に神の眞性に歸復するを重視して手段の生理を蔑視し、生殖は罪惡の根本なり愛欲は輪回の源、此を根本に脱却せされば生死を脱する能はすてふ論者もまた圓滿なる説といふべからず。然れども手段を神聖として高等に進んが爲にすと、また目的を輕視せば衆生は生々輪回を脱する能はすてふ方よりの方便として説くとせば可ならん。

無明及び煩惱とは未だ知性開顯せざる生理衝動に名づけたるなり。宋儒は形氣と名けたり。

遠心力と求心力

神の一切能によりて二展三展したる生物は自己の肉我を中心として我愛執藏等の自我を愛し生物自然の常規は自己を中心として自己の生活に利ならば之を求め不利の敵には抵抗しまた恐怖しすべて利己愛我主義なるすべて生物の通性なり。其自我なるものは生理上の我なり。肉の生活を目的とし自然世界の上に自己の利を獲んとす。

故に自然と本源の絶對無我の眞理に合一せん爲め高等なる靈性は未顯なれば、無明即ち生理衝動主義は飽までに此肉我を保存せんとの主義目的なれば、自ら大我に投歸せんとの意志無し。大我は常恒に一方に世界に發展する力とまた一面には攝取の光明即ち求心力を法界に普及して解脫し度生して本覺の光明に攝取せんと爲す。

肉我中心の生物は此に對して反抗の意味を以て盲目的に小我の目的に向て盲動す。此生理衝動は手段としては或程度までは遠心力を以て自我發達を目的として進行せざるべからず、生理生活の自我にして完全に發達せざれば靈的生活の方面を開發せんにも圓滿なる能はざればなり。自我中心の絶對に對する自然の遠心力はまた性の然らし

むるならん。

微少なる生物より進化して高等なる人類に進みしも皆この自我愛の遠心力によりてなり。外的生活が完全に達せるときは遠心力を以て求心力に抗拒するは處女が或年齢の時期に達する迄は雄性を拒むと云ふごとし。

生理我が完全に發達して精神が或程度に進化する時は自己の内的靈性が機會だに捕捉すれば自發せんとする靈的衝動神の憧憬として灰かに面目を現さんとす。

之は内に神の分子たる靈性豫め具備して、其手段階級として身體組織的の頭腦も圓滿に成熟し、外に求心力の性が充滿し、之れが世界に發現しては佛陀の福音宗教としても世に流行す。此世に行はるゝ宗教即ち如來求心の具體的現象なり。有佛無佛性相常住にて假令世に佛教が言語文字の間に行はれざるも眞理は本來常住なり。

宇宙に其靈的光明の力は充滿することは宗教的三昧の修行爲すものの經驗する處、求心力とは大我なる如來が衆生の靈性を開發して神の自己の本に復して眞理に稱ふ靈

の生活をなさしめんとする理性なり。神の求心に應じて自己を投歸すと云ふも敢へて此肉體を亡して靈性に入との謂に非ず。只須らく自己の伏藏靈性を開發し、靈の光によりて自己を發悟し、自己は如來の靈によりての我なるを認め、此靈我は絶對にして此彼なく永恒本然にて生滅なきを悟り、而して此靈の光明發せんか此光明によりて即ち一切能よりの分たる自己の生理生活を指導し訓練し靈化して神の中に生活するが之れ此神の求心に應じたる生活なり。今は理想に於て神の光明中の靈我となる、然れども此形はまた世界の相待規定の約束を悉く脱すること能はず。即ち此形は養分を攝せざれば生活する能はず、此の肉の命盡る時は實際の靈界に靈入す。是なん求心に全然應じたるなり即ち神と一體に歸するなり。

三 性

地上に於て生物進化の過程を見るに進化の目的は物質生活より精神の方面に在るが如し。原始生物乃至劣等物は一切能の分たるの生活のみにて活動し漸次に進んで感覺等も發達す。高等なる動物の感覺は能く發達す。また運動も發達す。俾る人類の及ばざる處なり。然れども知の分たる知性は未だ顯動せず。人類に至て益知性が發達す。知に導るゝ能力は意志もまた巧妙なり高尚なり。生類が最高點に達したりと爲す人類もまた動物なれば動物と共通の性を有す。然れども人類また特獨の點あり。

性相學者が人類の性相を三階に區別して、

一天性二理性三靈樞性と。

人類の頭腦及面を三分し三階級として兩眼の位より下を下級とし之を天性と爲し、兩眼より額の中位に至るを中級即ち理性と云ひ、額の中より上部を上位とし靈樞性とす。天性は一切動物共通の性にして即ち生理的生活を掌る感覺及び營養に關しての心作用は人類のみに拘はらず動物共通の性。中位なる理性は獨り人類に於て發展し推理

判斷觀察の心理作用は他の動物には有せざる處。若し此理性にして缺乏發展せざる人は常識に疎くすべて人間の智慧の完き能はず。上位靈樞性は人類が人間以上の神と精神的に交渉し感應し此宗教的關係によりて永恒の生命をも得らるものなり。

人類が此三性平均に完全圓滿なる人は最も圓滿なる人最も圓滿なる人格と云ふべし。若し天性にして不備なる時は形體上の不具者にしてまた缺損する時は身體不健康にして形體上の生活に耐えず。然れども動物共通性の偏的に發達して中上の二性が缺乏する時は人道豫備もなく常識もなく同情もなく唯動物慾のみ強く殘酷なることも敢てするに至る。また理性は完全にしてまた能く發達すれども靈樞性に於て缺少し發達せざれば、人間としては能く完全なる人格を備へ能く事理に通達するも宗教の絶對的神靈なる神を信じ神を愛し融合する如きは不能なり。

前二性は一切能に本づきて伏能の理性發達して手段としては既に達したるも靈樞性開發して始めて目的を達する性なりと云ふべし。

衆生性の中の人類の有する此三性中天性は個人即ち自己の外的生活を爲すの人、自己と唯動物と同じきことを盡すに過ぎず。理性は自己と自然界即ち世界的性と通じ、理性はすべて理系に於て萬物共通の理をも解し因果的の形式をも判斷することを得。故に自然科學の知識等は此理性に於て意識することを得。故に理性は因縁因果律にて時間空間の形式に行はるる範圍の事理は理解し信認することを得るの性なり。依他即ち世界性を開發したる性なり。靈樞性は自然現象相對的の事理を認識するに止まらず絶對なる神の性に合一し信認することを得。故に此靈樞性開發したる人は神と共に在りて其精神に絶對無限なる神と融合し美妙不可思議の光明的精神となる。故に之に到る人は即ち人格上の靈格なり。斯性の人は自己の最根底なる神に受けたる性が開發して衆生に在りて衆生にあらず世界に在りて世界を依止とする人にあらざるなり。靈格として絶對世界に依止する性格なりと爲す。

無明（三編）

起信義記に、夫心性は離念本不生不滅、而も無明有て自の心體に迷て寂靜の性に違し鼓動して念を起し生滅の四相あり。是故に無明の風力に由て能く心體を生住異滅して細より麤に至らしむ。經に佛性隨流して種々のと成ると。亦法身が諸煩惱の爲に漂動せられて生死に往來するを衆生と爲すと。無明が心體を生住異滅せしむる始生相を名けて業相と爲す。無明不覺の心動するに依つて起滅ありと雖も、相分未だ分たず無明の力を以ての故に彼の淨心を轉じて最微なる生相と爲す。甚深微細唯佛の知る所四相の中生相の微細にて菩薩不知所。經に曰く、菩薩知終不知始、唯佛始終俱知、始とは生相なり。無明不覺の力に因て知相等の種々夢念を起し其心源を動じて轉じて滅相に至り、長く三界に眠て六道に流轉す。

今日く、無明の力を以ての故に淨心を轉じて世界三に現すと云ふ如きは。無明の力とは如來藏性よりかはた能より出るや、法性本清、無明何に依つて起るの確答能はざる如く、

若し如來藏性は宇宙全一の心にして一體なれども、寫象と意志の二屬、即ち相と用一切知と一切能との二ありて一切能なる意志の力の不識の偏動力が常恒運動の力より絶對より自己内存の相對の方面に發展せられたる故に無明とは不識意志即ち一切能力の働きのなり。

然れば如來藏心無明なりや。曰く然らず。如來心は一切知と能とを有す。然れども力によりて展せられたる世界また世界より展生したる衆生が外的生活を先づ發達せんが爲の業用なれば、先に陳べし如く絶對心の意志（一切能力）が第二世界性には一大元氣として活氣をなし第三衆生性としては生理的衝動となる。絶對一大意力が世界は相對の故に一大元氣が陰陽二性となり。萬物を發生し、第三衆生には生理衝動が雌雄

兩性となりて自己と同種を分出す。

無明及煩惱の、根本無明は一大不識意志の力、第二は世界の一大元氣、第三は不識生理衝動である。

還相

今本覺不思議の薰力に因て厭求の心を起す、また真心所流の聞薰に教法本覺に薰するに因て體同用融するを以て彼聞薰を領し性解の力を益し無明の能を損して漸く心源に向ふ。始滅相を息、終に生相を息、朗然として大悟、心源を覺了する本無所動、今始めて靜なることなし平等にして始覺の異なし。

今日く、第一の神性が第三衆生性と轉展するも自己根底は第一の分なれば内的不可離の因あり。展せられて衆生我の遠心力が肉を愛し肉の生活のみを中心とする故に、

世界の方面即ち感覺の方にのみ依屬して自觀的に直觀界絶對の神の方に向つて知を得べき自己の本性を悟らず、故に本覺の求心と合一する能はざりき。無明生理衝動の我の方よりは心靈の方に直觀的に神の方に向ふて絶對の本覺と合ふことを得。心源を覺らば本所動なし。今始て靜なるにあらず、實に神の一切慧と相應するは直觀的に宇宙の內的自存を悟るなり。然る時自己の本覺が顯現す。其方面には生滅變化なし。

宇宙二面

絶對の二の屬性一切能の意力發動せられ常恆に徧動する方は生住異滅常恆運動の故に息むことなし。是吾人が經驗する自然界即ち感覺方面なり。意力の常恆徧動の故に世界及び衆生は四相遷流して止まず、是常恆建設生成造化と云ひ得べし。

一方は一切慧の方面にして吾人が直觀の對象にて常住不變四相に遷されず、此方面に常に常恆涅槃靈界を發見すべし。是諸佛陀は此方面に常恆に安住す。諸の凡夫は偏

動四相遷流の感覺界に依止す。

覺に本覺始覺

本有永恒心體法界一相如來平等法身を本覺と爲す。

始覺とは本覺の體より分展せられ衆生界に展現したる衆生が本有の靈性が漸次に向
上し竟に靈性開顯し來りて、觀すれば始覺と本覺とは本來一體之を心源を覺せる究竟
覺と爲す。

世界觀二面

世界と人生とに對する觀念に二様あり。甲は世界は全く眞に背き妄に隨ふ無明罪惡
生死、衆生の所感なる世界の故に人生と共に神に對せば其性反對なる質なれば全然厭

忌して佗に眞に順ふ方面を求めんにはと世界と人生とは之を厭離して淨き方面を欣ふべきものとす。

乙は謂へらく世界及び人生はもと神の物にしてまた神の子として人生は尙進んで高等なる神の世界に昇進すべき階級とし準備として必ず履ざるべからざるもの、世界は其教場なり。人生は神の國に入らんとする豫備科の學校なり。教祖及び宗教家は教師なり。種々の災厄苦難は是策勵の鞭なり。人生快樂を目的とする如きは非なり。また厭世者の如きは愚痴漢なり。

神より賦せられたる本性を全力を竭して發揮しまた靈化し煩悶を化して菩提とし生死即涅槃と悟る。人生八十年即ち義務教育の時日なり。焉んぞ千萬年を要するあらん。世界の萬物の裝置は悉く己を磨くの機、惡人の罵詈譏謗も打撻も心を鍛練するもの、何ぞ之を避けんとする。己を全ふせんか爲に寧ろ甘受すべきなり。

一日は淨土に於ての百歳に勝れたり勇猛精進に修して唐損するに忍びず。

此豫備の課業を卒るの時は必ず目的の高等なる如來自性の靈界に到達す。然り而して此主義は精神主義なれば自然界と靈界とは其途に必ずしも十萬里を隔てず。淨土と穢土とは本來同一の彌陀身心内の兩方面なれば、衆生の精神に感覺と直觀との二面に於て、感覺は自然界を直觀は靈界と接せり。然らば死して後始めて極樂たるにあらず一面に是紛々擾々たる爛漫たる五濁の中に奮行し、炎黑燄たる精神をば觀念裡に常寂光の靈界に逍遙して八功德水に神を浴す。世は益生存競争激しきに進むに速度急なり然れば則ち一方に精神を逍遙せしむる神秘の靈界を發見して之に依て優々と靈を養ふにあらずればとても勝利は望むべからず。

自然と靈界とは同一の彌陀身心内にして、一方は修行奮闘の方面、一方は精神休養の爲め、而していよく卒るの日は永遠に神と共に樂しみ理想の靈界は全く實現す。

事に觸れ縁に對して苦悶しまた悲觀を懷く如きは修業未熟の致す處、寧ろ愧づべきなり。益奮發勵行せば既に純熟する時は日日の業務いかなる事に對しても敢て畏るゝ

なくまた憂なく不足なきにいたる。よく努めよ。

三 性

一、圓成實性。如來自性、絶對無規性、如來心、

如來自性は因縁因果等の相待規定せられて成れるにあらず。絶對無規定の一圓を云ふ。自然法爾に成るを云ふ。萬物にありても變らず永遠に變せず故に眞實本有の自性實性と云ふ。即ち神性即ち如來自性なり。

二、依他起性。相待規定。世界性。如來藏心。

實性即ち神に一切知と能との屬性ありて、天則秩序となりて自然界の方面に向て萬物を開展するは、一切能の力によりて發生せらる。自らの力にあらずして相待に規定せられて成長す。故に是世界普遍的の性なれば是を世界性と名づく。

三、分別起性。個々差別。衆生性。

世界因縁に規定せられ因果に約束せられて複雑極りなき相待規定より成立し、衆生の性は千差萬別各々特殊なる性をうく。本世界に規定せられたるこの性なれば因縁に隨て轉變し常定性あるなし。

神が天則即ち法身如來來藏性より自然界に向て開展するには平等全一より差別また複雑極りなく開展す。

實性は性智。世界性は賴耶識。

第一義如來の自性は大圓鏡智本然の光明徧照十方。世界性は第二義相待規定、第一二を合して如來藏性と爲す。第三分別衆生性は依他成所の心を賴耶識とす。

衆生の所依、即ち衆生が自然に此世界に生を受け、世界の自然律なる因縁に約束せられたる上に自己を認め、己の人生の依止する所は即ち自然の世界にあるものとす。俗に所謂天なり。自己の全幅を天に依屬する外なきを信す。

而して世界天則に自然に規定せらるゝ生理的精神の頼耶は先天的に自然に依止し自然己上に自己の運命を依屬すべき所歸のあるを悟らず。世界相待規定の世界には本より因縁所成なれば其根底は自己にあらずして自己は因縁によりて成し因縁謝すれば離るべき性なるを覺らず。

自己の要求の幸福を此自然に期す。而して世界は我に幸福を與ふる親として依屬せしも、因縁約束は縁に隨て轉變し自己の要求は世界性にてはいかんと成し難し。只自己が進んで實行せば其因に報ゆる果あり。複雑なる因縁より成立せし自己の運命なれば甚た要求は容れがたし。縁謝すれば滅す。永遠の平和常住の生命の安心は、自然の他に求むべきを自覺し、世界は第二位にして、第一位の上に立たる第二位にして、絶對に依屬すべき性あるものにあらざるを自覺し、進んで第一位の絶對無規定なる神に依止するの眞理なるを信認すべし。